

宗教は感應也。以上を以て人或は主觀的空想となさんか、げに感應の性質は主觀的也、人々の宗教的意識の高下によりて其の感應の内容をも異にすれば也。畢竟自己心情の要求を客觀に打出だして神の内容を作り、而して此く打出だされたる神が吾が心情に反應して、一種微妙甚深の作用即ち宗教的意識なるものを現ずる也。耶穌の如きも畢竟其の偉大秀絶なる心魂の要求を、無意識に客在に打出だして、こゝに我父なる天地の神を結び出だし、而してこの神との感應によりて其の混々不盡の生命の源泉を掬み出だし、萬代無窮に溢れ流るゝに至れる也。譬ふれば猶美術家が自家の美術的^{イデア}要求に驅られて一個の觀音を作り、山水を描き、而してこの作物に我れの實現を觀て、心恍惚の一境に

入るが如し。其の自ら迫り出だし、結び出だしたる實在によりて感應應化の性を盡くすは一なる趣なりといふべきか、予は敢て實在といふ、主觀の結び出たるものなるが故に、漫に之れを空想といふ勿れ、かく言はゞ吾等が造り出だせる國家や、制度や、法律や、習慣や、一言すれば世の文明史其者も畢竟空想と見らるべし、空想の語斷じてこの場合には妄也、誰れか之れに實在の名を否むものぞ。詩といひ、美術といふ、而も眞の詩、眞の美術は現實其者よりも□かなる、儼かなる實在の權威を以て人に迫るとあるを知らずや、詩は實に歴史よりも一層哲學的^{イデア}なるとあり、シェイクスピアの作中の人物は、日常閑暇の路上街頭の人物をして生色なからしむる、躍如たる個相、實在性を有するならずや。唯この場

合に異なるは、現實の人物は神が直接に作り、詩中の人物は神が詩人といふ美しき微妙なるオーガンを媒として作りしとの差あるのみにて、其の造化の根本原理に至つては二趣あるを見ず、眞詩人の作り出だせし人物や、山水や、其の一個の事實としては自然の人物山水と相駢ぶの權威を有するもの、一を實在とし一を空想とするの權利あらず。詩人はむしろ神の造らんとせし根本の意匠を襲うて、其のあるべかりし事を現實化せしもの、即ち神の聖業を補ひ完うせしもの、此意味よりいへば、眞詩人は神と其の座を分つべきものといふべし。

○ 神の思慕要求は、人の至情より湧きいつるもの、こは事實

なれば事實として實證躰達するの外なし、理性によりて此の事實を左右し批判する能はず。宗教哲學はこの事實ありて後これに知識の要求の満足を求むるものに外ならず、而も事實には如何にするも知識の入り込む能はざる未透徹未了解の深奥あり、知識は其の周圍を七匝八廻すべし、而も其は到底其の周圍を廻るのみ、其の中心の生命的炎焰には觸るゝ能はず、唯之の炎を盛る器の形を發明するが知識の能事也。知識理性の要求とは畢竟この器の恰好、大小、適不適、比例、場合等を穿鑿して時代の知的要求に應ずる事に外ならず、されども其を盛るべき要求の炎は智以上に立つて、むしろ智を願使する力あるを忘るべからず。——知識と信仰とは此くも區別せらるべからざるは勿論なれど、大

詩人に於ては、
も、し、浮、誇、心、
に、充、た、さ、れ、
さ、る、限、り、は、

昔、し、會、て、我、
れ、詩、人、た、ら、
ん、と、し、き、ら、
す、る、所、言、表、
せ、ん、と、す、る、
事、に、勝、ち、た、
り、に、我、れ、み、
き、の、人、た、れ、
宗、教、の、人、た、
ら、ん、と、す、る、
而、し、て、言、表、
す、る、所、言、表、
の、常、に、言、表、
せ、ん、と、す、る、
所、よ、り、不、足、
貧、寒、な、る、を、
歎、ぜ、さ、る、を、
得、ざ、る、也、

作物に現れいづる實在性の厚大なるものほど其詩人は眞
なり大なりと稱せらるべし。故に眞詩人ほど自己作中の
實に驚き敬し、跪拜せんとする也。是に至りては是れ自ら神
を打出して之れに跪くもの、而してこの感應の一境に甚深
の静かなる怡悦を感ずる也。眞詩人の喜びは故に、宗教的の
喜び也。單に詩のめでたきを喜ぶの喜びにあらず、自ら作
出せる對象に打たれ、之れと感應して喜ぶ祝福の感也。少く
とも彼れの美意識は一面鏗爾として實在と相觸れたる意
識と相錯り縈ふ、むしろ此沈痛なる實意識の華さけるもの
が彼れの美意識也。大詩人の詩はむしろ實在に對する味
の言葉也。實意識の餘韻也。反響也。沙翁、ダンテ、ミルトン、バ
ンヤン皆然らざるは無し。——眞詩は、美しき輪光を放つ實

眞詩は
"noble and
truthful"とい
はる、然るに
に世にもし
truthful and po-
etryとを兼
れたるもの
あらば其は
宗教的眞理
也。詩は如
何なる偉大
なる詩にて
も幾分の
playあり、
a fictionあ
り、爲あり、
宗教的眞理
は此の理に
照すなし

在也、吾人の之れを讀むや、單に其の燦たる輪光の美に恍惚
たるのみならず、更にそれ以上の物に觸るゝの意識あり。
——宗教上の眞理は味へば味ふほど豊贍無限、春雲の岫に
集まる如く、掬めどく盡させぬ生命あり、之れを現さんと
せば如何にしても詩を藉らざるを得ざる也。宗教上の主張
は詩を以て發表するの外道なき也。耶穌、ダビデ、バンヤン、禪
家。——芭蕉の如き、西行の如き、之れを詩人といはんか、宗教
家といはんか、殆んど惑ふ也。單に詩人とすれば、何ぞ其の天
地の風懷に孤心を寓するの切にして摯なる、彼等の所謂花
鳥風月に對するや、實に涙に餘る深奥の思あり、我等は芭蕉
の句中より煙波無限の詩を拾ふと共に、更に天地の心情に
迎れる一往深奥の意識に打たるゝと屢々也。其實例多々、誰

花のやさしき呼吸の中
 にも我呼吸の共
 奇感あり、感
 の脈うつも
 のある何故
 が兄弟なれ
 が共に父なし
 て神に祈り
 る言葉と捧
 げの葉とす
 人の詩と
 彼れを
 人亦之れを
 を自己視し
 を附し之れ
 作に自己の
 劣等詩人は
 ど自己の創
 作に自己の
 性を
 人亦之れを
 彼れを

人の菰着ています花の春の如きも……。——ウオーツウ
 オースの如きは、路邊の *The meanest flowers* の中にだに *too*
deep for tears の思想に讀み至りたり、花の中に自己を見出
 だし、神を見いだし、之れと感應して無限の喜びを感じたり。
 詩人亦其根柢に於いて宗教的衝動に驅らるゝ也、神を慕ひ
 求めて無意識に其要求を自己の作物中に満足せしむる也。
 ——何故に自己の作りものに自ら跪拜するぞ、他なし其處
 に自己の解する能はざる權威ある物が現前すれば也、ブレ
 センス、オブ、ソウルを看れば也。真に跪拜するに足らざる
 ほどのものは、未だ美術家、作者の心を満たすに足らず、何處
 までも個相あり生命ある實在の一片を創り出ださずんば
 彼れは満足せず、休止せず、而して一たび之れを創り出づれ

す、天才の作
 は不然、(エ
 マルソンの
 over soul
 参照)

ばそこに満足あり喜悅あり、これ何故ぞ、感應、作用、成り立つ
 が故也。生命は生命とのみ相遇うて相よることよべし、相黙
 契すべし、相感應すべし、人は自ら作りしものと相交り、相語
 り、相感應せんとす、奇なるに似たれどこれ人心の根本の衝
 動也、名づけて宗教的衝動といふ、一切の事皆此衝動より來
 る。學者だに確實なる真理を發見して、此真理との感應を
 求めて、はじめて無限の喜びを得る也、これ畢竟實在を得て
 よろこぶ意識也、單に發見の手柄を自矜する卑しさものに
 あらず、實在との感應を喜ぶ意識也。——詩と實と若し兩立
 するものあらば宗教の外あらず、宗教は詩といはんか、實也、
 實といはんか、詩也、美意識と實意識と織りまじへて成るも
 の宗教的意識也。——宗教詩の特殊位地、——他の社會的、政

治的主張を寓する方便としての詩との別。——宗教詩は不然、詩を方便とするにあらずして、一面詩其者也、主張を詩に寓するにあらず、主張其者が一面詩也。——符號をもパンヤンの如く借るとあるべし、而も符號を剝ぎたる底に猶宗教其者と離れざる符號ある也、他の主張詩、傾向詩の符號を取り除けば、赤裸々の抽象理となるとは同じからず。——殊更に其以上に詩的形式を藉るの必要なしといはんか、然り之れを藉らずとも尙詩的一片として残るべし。——奇なるかな宗教詩。パンヤン、デョブの詩より、詩的誇張の辭を取り除くとも尙詩として残るべし、否彼等が其の宗教的高調の熱情に驅られて物せるが即ち其詩となれる也、彼等にありては宗教的意識を如實に表したるもの、即ち詩となれる也。

詩と實と一也、否宗教其者也。勿論多少の symbolization はあるべし、されど其は symbol を藉るにあらずれば表現し難き富贍の情あるが故也、已ひを得ざる爲也、symbol と sym-bol として、其の美的辭藻に専念する所謂詩人とは異なる。

神と cooperate し、神の事業に participate し、天地の化育に參ずる、大丈夫此一境に到つて、直ちに之れ神生活に觸れ得たるものといふべし。こゝに至るにはまづ神と感應し、神を我有となし、神と同在するの意識常に在らざるべからず、我の裏に常に實在の威力を有し、soul のプレゼンスを感じて、我即金剛不壞の真人たるの意識なかるべからず。我等は必らずしも神となるを要せず、これ不可能也、むしろ我と

聖物の所
住の捉へ
汚るの意
「實」に
たるに
「實」に
たるに
直ち
もれたる
もれたる
識れ
識れ

而して又靈魂ほど感應の揭焉たるものなし。他人に向つて感應を求むれば直ちに感應來る、神に向つて求むれば直ちに來る、天啓の聲は雷の如く我が中に響應し來る也。

「支那哲學史」五四四頁參照

「求むるものは得ん」といふ眞理は宗教上の最要諦也、第一眞理也。これ物質界にては見るべからざるもの、金欲しとして金は來らず、打出の小槌は物質界にあらずして精神界にある也、感應の前には時間空間の限りなし、釋迦直ちに躍如として應じ、耶穌應じ、一片の郵書によりて天涯異域の友と相應す、思へば驚くべき事にあらずや。而して神は最も近し、吾人はいつも神と入る呼吸、出づる息にて感應しつゝ、此生を送るを得る也、嗚呼驚くべきかな此の事實。——要求に於いて吾人は神に入り、神は吾人に入る、要求は我の要求也。

我等の宗教的意識は極めて淺し、而も此意識を表象するに苦言をなすに苦しむ也

而も其は神の啓示ならずや、神の刺衝にあらずや。要求其事に於いて吾人は既に神と觸れたる心識あり、要求に於いて神は吾人の後ろに立ち又前に現る、要求の絲を後に辿れば神に入り、前に手繰れば神を迎ふる也、要求に於いて吾人は神に取り圍まれたる也。(意識せざるものはやがて此れを意識するに至るべし、其時の喜び如何ぞや。)

○

神火論
夕燒の大觀
Solid and
liquid fire
— Milton
詩人のイン
スピレーション
又天火
の流動也
心の動也
殿めしき

エマルソンの over soul 中の名語——ストア派の神火觀——宇宙は celestial fire 也、流るゝ如く融會透徹して、而も情熱あり、元氣あり、叡智あり、詩あり、一氣徹底して抑塞凝滯苦澁なし。沈々たる火也、solid fire 也、passion の火にあらずして純愛の火也。——ブラウニングの “All love renders wise

は毀れて合一
つに融けて合
ひ流れて合
崇高の境に
何故一我に
此得ざるに
躋り何故に
常拘々たる
常に執
如影に固執
するぞ

inits degree.” の語——調和の火也。——火は以て惟りよく
火を消すべし、吾人の「エゴ」の人火は、惟り此天火をもて淨
化すべし。吾等の知識をして此火に養はれしめよ（ヘラク
リトス）天火に觸れざる智は貧寒枯瘦の知識なるかな。——
我等の徳をして此天火より華さかしめよ（ストア派は曰く、
徳は「力也、而して力は火氣の緊張態也」と。——我等の事業を
して此天火もて鍛えあげしめよ。

○

エピクロス
も亦云

孔子曰く、朝聞道夕死可矣、高いかな語や。ストアの賢者
曰く、智慧の幸福は時を累ぬるを要せずと。エマルソン曰
く……over soul 参照。

○

美徳に死無し。美徳に觸れたるものは永遠に觸れたる
ものなり、此には常住の現在あつて未來なし、過去なし、靈魂
不滅の法は善生活其者にあり。これ即ち無「缺陷」否定を
去つて「實」に與り、實の中に我を見出だすの道也、而して實は
不朽也、不死也、漫に靈魂の死後存續をいふは墮落也。

ミルトンの「コーマス」中の名句あり、曰く「ひとり美徳の
みぞ自由なる、美徳は汝に教ふるに如何にせば、人寰よ
りも高さ處に上るべきかを以てすと。」

○

梅一枝月黄昏の風情哉

梅が香のどこやら闇の朧かな

三日月の頃咲き揃ふ梅の花

○ 嗚呼信なき世なるかな。宗教の熱情に乏しき世なるかな。

神火論
西洋哲學史
三〇五頁

「一處到らざるなく一息運せざるなし」
アイアヤとミミとを具へて活動するものは神火のみ「倫理」トア倫理」参照

○ エマールソンの over soul 論終末——He will weave no longer
……ストア派の賢者の一彈指云々の語、一如融會の境——
此境、時間と空間とを絶す、always present 也、神は吾人の後ろにあり、前にあり、過去にあり、將來にあり、一草一木の微に infuse して剩す所なし。——現在のみあり。——人此境に達して始めて神的生活を送るもの、過去將來の思に累するものは墮落也、それだけ本眞の性より迷ひ出でたる也、唯々現在の一瞬間を幅に於ても長さに於いても深さに於ても最

Solid fire は
春の雨の如し、
有る物と力を
共に萬物と
養育の力有
す、愛の火を
ずして、智を
は、智を滅せ

も富贍なる充實なる生活を送り、以て永遠と最も多く觸るゝもの、これ即ち immortality の生活也。——鳥や魚や、過去と將來とに役々たらずして、悠悠空に翔り淵に躍る、彼等にはいつも現在あるのみ。——汝曹何を食ひ、……汝曹のうち誰れか思ひ煩ひて其生命を寸陰も延べ得んや、一日の苦勞は……
——一部一隅にも全性靈を實現すべし、これ天の則也。
——これ天則に従へる生活也。——カーライルの、槌の一揮一下ごとに云々の言。——我曾て自ら姿見鏡を見て我顔の inspired light を拜しぬ、靈魂は中より靈光四射して眼睛直ちに靈の光と融け合ひたり。——基督、山上の白衣の姿、ステパノの顔、天使の如く耀けりと。——肉が靈と融け合つて手を握りたる一如の姿、これ即ち神火にあらずや。——罪勝て

ば肉の表現強く、硬く、黒く、ダル、マッシーヴになる也、ツラン
スペアレントになる也。

生ふし立つ
アラウニ
クの詩
（スビノ
ザの神愛の
約翰傳七章
十七節

我等何故にいつも常久の神火の波に浴して玲瓏の生を送らざるや、何故に動もすれば頑冥不昧なる瓦礫の生を送るや、何故にいつも天地を祭壇として自ら祭司たらざるぞ、何故に動もすれば泥土の日常生活に匍匐して左軀右脛するや、これ眼の明ならざる爲め也、迷誤の爲め也、神性の發揮足らざるが爲也。

○
神は現實有限の相としては活動的、積極的、倫理的也。其の絶對充實の相としては靜觀的、消極的、美的也。善而美也。

涅槃也。

啓示論
神智
時と如く
湧く如く
より迫り出
づる時あり
人此神は一
種の神は器
の觀をなす
也

○
我が中よりレギールする實在は、我れの不可思議として打ち仰ぐの外なきものなれど、而も其は我れを縛り羈束する外的のものにあらずして、我を自由にし、擴大し、開眼する生命たる也。實在の我中より顯現するや、妙に我が中心の歎き求めと相アッコードし、之れをフルフィルせし如き親しさとしてインテリシビリチーとを有す。君主の如く蒞まずして父の如く友の如く蒞む也、其の言ふ所に一言一句吾人は唯々として隨はざるを得ざる立派なる權威ありて、恰も吾れ自身の根柢の要求を明かに曉り知りたるもの、如く語る也。我等如何に頑冥不靈の子息なりといへども、此同

soil 也、soil の活動也。無意識的我といふものあれど、こは畢竟我とは別なる over soil 也。されば我と神との境域は實にエマルソンの語の如く、何處まで、我が終つて何處から神が始まれりといふべきを知らざる如く、恰も我が氣息の茫々無邊の氣海と相接し相流れ合ふ如き親しさ也。——我等の爲し得る所は唯要求のみ、努力のみ、渴仰のみ、追慕のみ、眞理を要求し渴仰す、於是か眞理の顯現あり、美を追求し要求す、於是か美の顯現あり、神を要求し追慕す、於是か神は窈窕として吾が靈臺に立たせ給ふ。我等は唯一切を喚び起こし、祈り出だす呪文を有す、而も此の呪文が如何にして一切を喚び出だし顯現するか、其の次第手續等は不明不可思議也、唯だ我が要求の聲に應じて我が前に立てる實在あるを見るのみ。 creation は intuition 也、being 也、discovery 也、penetration 也、故に我等が眞理に對し、美に對し、徳に對し、神に對する正當の態度は、唯だ謙讓以て其れに打ち向ひ、懼れ、愛し、戀ふるにあるのみ、愛あり要求あれば、感應あり顯現あり。——二と二と合すれば四となるといふ眞理は、我が故意に作りし眞理にあらず、まか思はざるを得ざる眞理の一種の顯現也、soil の理性の顯現として、我等は其の權威に従はざるを得ざる也、何故と問ふを許さず、問はざるも其の意味は自明也、如何にも眞也と冷暖自知する也、これ soil 自身の自悟也。天地の soil と我が soil とは父と子との如し、自他默契互曉して舛ふ所なし、父の顯現し來るものは、子、其意味を解して之れを是認す。他律的ならずして自律的也、外的な

らずして内的也、父唱へ子和す、これ實に宗教的感應也。——因果律の如きも自から作りし眞理ならずして、顯現の眞理也。——されど神の吾人に顯現するや空にあらず、必らず我等既得の人格經驗を材として、new combination をなし給ふ、悟に其人との特相あるはこれが爲め也、(ポロ、マホメット、耶穌皆異なる) 顯現は空に無物上になさるゝものならず、必らずや既に顯現したるものを媒介とする也。

一切の直覺的眞理は、プラトーン風にいへば我等が憶ひ出ださんとする努力に應じての顯現也、我れの爲し得る所は唯努力のみ、此努力に應じて現るゝ眞理は我以上の超絶界より閃き來る。努力は謂はゞ我れと神、既知界と未知界との間に架する橋の如し、我等此橋を

架けなば、彼方より眞理又は神歩み來り給ふ、眞理も亦一種の感應也、我等が要求に應じて顯現し來る也。亦思ふ、努力要求は薪を積むなり、眞理は此薪上に燃えつく天火也、聖火也、我儕はこの天火の燃えつく手續を知らず、唯だ薪を積むと共に其の上に點じたる火を知るのみ。薪とは何ぞ、要求也、人格の形造也、我等は Subconsciousness の境に種々と工夫し、既得の知識、既得の經驗の material を combine して眞理を捕へ、神に觸れんとすべし。されど眞理に尋ね逢はざる間、神を捜しあてざる間は我等は眞理を知らず、神を知らず、逢ひ見て始めて慳然相得る也、それまでは到底暗中摸索のみ、工夫のみ、要求のみ、煩悶のみ。相見ざる間は、春の夜の朧ろの

月のいづこの雲に忍び行きつゝあるかを慕ひ求めながら、其の俛は依然として未知也、未現也、唯一念の要求こそ力あるものなれ。愛は人をして神に逢見せしむ、逢見せざるうちは種々の偽真理、偽神明を描きいださん、而も soul は惟り soul と相知る、眞の神、眞理に(少くとも其の機根相應の逢はざる間は其れに迷はざるとなく、ずん／＼之れを棄て、つひに眞の神に逢着するや、即ち之れに眞の印を捺して之れを證する也、種々の工夫は畢竟摸索努力の要求のみ。

○ 梅咲いて小窓の人のうつくしき

古祠梅凜として句哉

大江戸の花の用意や雨三日

○ 春の雨朧ろを花に打ちかけて

○ 人格の觀念は倫理の歸着點にして宗教の出發點也。

○ 書經に見えたる上帝は人格的上帝也、又其天子の觀念など可味。大禹が洪範九疇を天より錫はるとあるは、モーゼの故事と比すべし。

○ 禪とプロテスタンティズムの宗教的意識及基督教の意識は如何にして調和すべきか、西倫理史二六一頁参照。

シムボル論

予の所謂シムボルとは宗教的意識の知的、寫象的形式の方面を指す。如何にイルミチーションといふもエクスタシーといふも、人は全く自我を超越しつくす能はず、多少は其人の人格、機根經驗の與りて其が土臺となり、素材となる所ありて、而して此等の經驗的方面、現實的方面、一言すれば自然我を媒として、更に嚴にいへば此自然我の有する經驗を材として成れる一種の寫象的形式を遁して神と相接する也、此の形式に盛らるゝものは、實在と相觸れたる意識（むしろ感也）生命と生命と相道交せる意識也。これこの意識は不朽のもの直ちに神の實躰より流れ出たるもの、唯其が流れ出て、吾人に觸るゝには何等かの知的形式に容れられざるべからず、形式なき純生命といふ如きものは、吾人

耶蘇の完全なる宗教的意識に於て
 其の進歩の無制限なるを以て
 法を無視せざるも、其の中心
 也

の有する能はざる約束也。随つて此くの如き生命の意識も知的形式に盛らるゝ以上は、多少其れに色つけられ、影響せらるゝもの故、即ち其知的形式を離れて其れ自身を味ふ能はざるが故に、更に別言すれば其知的形式と同時に具象的一昧として味はざるを得ざるが故に、これほどの意味に於いてはそこに有限的變化的分子を着せりといふべし。而もこは要するに知的形式より來れる影響のみ、随つて知的形式の發達と共に、或は又生命意識の發達と共に、相關的に發達進歩して已まざるべし。要之、予の所謂シムボルは知識の形式、其者の義也、随つて知識論上の制限を受くべし、されど生命の意識、其者は不壞の當躰より來れるもの、絶躰的中心と觸れたる一側也。——禪の悟の如きも全く此シム

ホル以上に立つものならず、一面シムホルの制限を受け居れる也、此かればこそ悟に人各々の特色あるなれ。全く自我を超越し了し、排除し了して絶躰と冥合しつくすと思ふは誤れり、如何に漠然ながらも尙何等かの知的形式を媒として所依として其の超自然的意識の可驚一境に上れる也。唯此一境に上れるものは、其の超自然的意識の強大壯快なるが爲めに一念其れに奪はれて全く自我を脱し盡したりと思ふ也。白隱の真人云々、未生已前云々、金剛不壞云々、玉盤云々の例を見るべし。

(三月十五日)

悟論

耶穌の悟と釋迦、プロチーノスの悟とは其内容に多少の異ある、尙同じく神的アルコールを飲むも一はピールの他は葡萄酒的、他はブランドー的とやうに異なる

如くならん。而してこの内容の差異は毫も貴ぶ所にあらずといはむは誤れり、同じ酒ならビールはビールとして正宗の有せざる特殊の味を有するが如し、予は同じく悟りの中にも、釋迦的よりも耶穌的に悟りたしといふが如し。何でも悟りさへすればよいといふは食を擇ばざる精神的饑渴者のいふ所、同じく精神的饑渴に迫られながらも吾人は尙其性の要求する特殊の食物を得んと欲せずや、又同じく食物の中にも成るべく滋養多きものを得んとする如く、成るべく精神を豊富に十分に全體を満足せしむる底の悟に就かんとすべし。

○

汎神論の缺點
 * 汎神論の缺點は、(一)個人的人格の觀念を無視又は輕視すると。(二)無の一字に重を置く結果、おのづから虛無的、消極的、出世間的、樹下石上のなる。(三)随つて嚴格なる道徳上の觀念を、善惡無差別觀を取る(缺如すると、世間の禮法に對して無頓着的態度を取ると、ストアなど、似たる所あり)例へば一休の放縱、峨山の放屁、宗演の淫縱等例とすべし。(四)無我を唱へて其實一種の自大我を有すると少く、禪の自我は謙虛自ら下る底のものにあらず。(五)敬虔の念を缺くと、天地人生に對して敬畏肅然として危坐する底の pious feeling なし。(六)己に人格に重を置かず随つて自由意志等に重を置かず、道徳的罪惡の責任の如きを輕視す、むしろ善惡の差別などを度外視せんとする傾あり。(七)必至觀

の遺産相續
 争ひの例
 人を忍ぶ自
 ら忍ぶに酷
 にして權利
 を争ふに勇
 氣を欠く
 の徳なき
 に至る
 慈悲の平
 等に偏す
 森脇氏無
 善惡の差
 別觀は過
 り也愚點
 すべき見
 との點な

汎神論中にも禪の缺點は(一)個人的人格の觀念を無視又は輕視すると。(二)無の一字に重を置く結果、おのづから虛無的、消極的、出世間的、樹下石上のなる。(三)随つて嚴格なる道徳上の觀念を、善惡無差別觀を取る(缺如すると、世間の禮法に對して無頓着的態度を取ると、ストアなど、似たる所あり)例へば一休の放縱、峨山の放屁、宗演の淫縱等例とすべし。(四)無我を唱へて其實一種の自大我を有すると少く、禪の自我は謙虛自ら下る底のものにあらず。(五)敬虔の念を缺くと、天地人生に對して敬畏肅然として危坐する底の pious feeling なし。(六)己に人格に重を置かず随つて自由意志等に重を置かず、道徳的罪惡の責任の如きを輕視す、むしろ善惡の差別などを度外視せんとする傾あり。(七)必至觀

に傾く。スピノーザの例——パウルゼン七二頁——禪の方法亦不自然的、不人情的、特に難き事をするを貴ぶあると、肉躰を傷ける如きとは成るべく取らざるを可とするが吾人の主義也(己むを得ざる場合の外)。所謂公案なるもの、價值如何。(パウルゼン八四頁参照) (三月十六日)

○ 佛家の徒は動もすれば現實界の差別相例へば生死流轉是非善惡等を迷妄視して、本來の道理より見れば此かる事なし、此く見るは吾人の迷ひなりとやうに説く。されど此く打ちつけに迷ひとするよりも、むしろ其を事實と許して、さて其上に其究竟の意義及解脱の方法を設くるが一段健全にして科學的也。迷ひと見ずば安心出來ずといふは違

へり、佛家は差別生死の事に偏へに眼を掩うて之れを抹し去らんとすれどむしろ之れを抹せずして濶□の根據より其解脱の一解を立つるが吾人の要求と合する也。「阿字本不生とせば諸法は本來常住不滅にして解脱の床に住す、其上に生滅あるは是迷見の所爲にして、生滅なきものを妄りに生滅ありと見るもの、一旦大悟せば本來常住の眞如に契達する也云々」の語の如き餘りに迷見呼はりに過ぎずや。

○

禪が所謂韓樵塊を追ふの方法は、畢竟一つには以て吾人の意識の集冲を利し、且妄念の排除を利して眞理顯現 (revelation) の地をなさんが爲にして、又一つには又此くして物の差別相を一枚づゝ剝ぎゆきて、其の模様色を薄くして以

て自然と實相本躰といふ地色即ち本來の面目を浮び出てしむる手段に外ならず。差別に執する間は吾人は差別見即ち相對智が主にも働きて、其下に横はれる實相の太塊は意識に上らず、差別紛々の知を減じゆけばちのづから直觀作用の働き暗中より躍り出て直下に實相を攫むに至る、論理作用の極まる所、直覺作用あり。而も其はカント風の單なる制限觀念としての實躰ならず、こは冷かなる差別知の所産也、此場合の實躰はむしろ直觀也、feeling也。知日の滅する所、情月の輝くあり、What Whatと推窮しゆく中に吾人の情的直觀作用躍り出て、憂然として實に觸れ悟を得る也、因果を追ふの無端無極に呆然自失せんとするに至りて直觀作用横合より出て、豁然自悟する也。其は抽象的實在

證道歌參照

つて低れしとなき顔を低れて和解を求めんとせざるを得ざる也。而して其偉力をもて我傷痍の醫治を希はざるを得ざる也。これ或は幼稚なる詩的感情なるべし、されど此詩の中には哲學尙よく釋する能はざる實を含むと知らずや。

安心の二解

○ 安心に二意義あり。一は消極的又は快樂的といふべく、他は積極的、倫理的、活動的、又は客觀的と稱すべし。吾人が宗教的信仰は單に感情の状態としての安心を得んが爲めにあらず、此れも一衝動たるべし、されど其の主なる衝動はむしろ天地の實在と相抱かんとする活動的客觀的要求也。學者動もすれば宗教の根據を幸福といふ事に置かんとす、されど幸福の意義もし快樂の意義ならば、或は或種の快樂

の義ならば、其はむしろ起原とはいふべくも正當なる根據又は理由とはいふべからず。其はむしろ動力原因にして有極原因にはあらず、或は又其目的の不離の一部(結果としての)又は相伴物としての(たるとはあるべし、されど其主成分をなすものとはいふべからず。幼稚なる宗教的意識には神佛を單に快樂を得るの方便として之に跪拜するものあるべし、世の多數者は然り、されど進歩せる宗教的意識は然らず、所謂かゝる安心を得んのが動機(感情的動機の義)たるとはあるべし、縁たるとはあるべし、此意義にての動機と目的とを混す可らず、縁と眞因とを混すべからず。快樂と信心とは衝突することあり、而も吾人は快樂をすてゝも神に向ふ也、これ吾人が單に快樂的に神を見ずして、自家本性

メット釋迦
の縁一般の宗教
家はヘドニ
ステクの方
面にのみ
appealする
何あり

の已むに已まれぬ要求よりして信仰する所以也。或は曰く、信心には何等かの理由なかるべからず、而して其理由をいはば、要するに安心即ち快樂又は幸福といふとに歸せずやと。快樂としての安心が信仰の理由ならざると前論の如し予輩はこゝに理由を説くのを必要を見ず、神を慕ひ求むる吾人の意識この究竟の事實を外にしては理由あらず、根據あらず、神其者に對する一種向上の衝動が唯一の理由也。若し強ひて理由を求むれば、此かる衝動を満足せしむるとによりて達する吾人の本性の成就也といはむか、神は要求の所産なり、されど此要求は神といふ目的物を得んとする客觀的要求也、單に快樂といふ心状態を得んが爲めに、其れを目的として神といふ方便を扱ふにあらず。快樂即ち安

心は此の要求満足の果として現すべし、されどたゞ此快樂の爲めにのみ神を信ずるは、世の福田主義の利己的迷信に外ならず。神を信ずる究竟の理由は此かる快樂的、主觀的要求の然らしむる所にあらずして、寧ろ人心の根柢より湧き來る不拔の客觀的、倫理的要求なり。或は云く汝のいふ如き本性の満足即ちこれ一種の安心快樂にはあらずやと、然り此意味にて安心の義を説かば、予輩この義を安心の正解少くとも進歩したる解と信ずる也。まかいふも不可なし、然れ共こは前にいふ如き單なる快樂其者にはあらず、單なる主觀的感情態としての快樂安心にはあらず、一種の安心快樂也。神と道交して本性を完うせる一個の客觀的意識の事實に伴ふ快樂也、安心也、即ち本性の満足又は實現

眞に我を恃むものは神に頼まざるを得ず、神を恃むものにして始めて眞に我を恃む大丈夫たり。天地の根本に實在せずして我を頼むものあらば哀れ其我れなるものは秕糠の如き我なるかな。——シュライエルマヘルの絶對的依願の感情の語味あり。

○

禪論

佛教殊に禪と耶穌との根本區別は、人格觀念の有無にあり。パウルゼン曰く、

In Buddha the enlightend One, there is no passion, we might almost say, as *Personal will*; a gentle teacher, he travels from place to place, communicating the truth discovered by him that life is suffering, and that the way to salvation passes through

the knowledge of the essence of existence. The life of Jesus is a struggle with the world and with evil, which confronts him in *personal form of Satan*. Buddha's death is the quiet extinction of a flame, the death of Jesus is the victorious death of a hero. The words of Jesus are flames which arouse passion, the preaching of Buddha is monotonous repetition; we might almost say, it has a hypnotizing effect.....(p.115)

佛陀の説教云々は容易にしか斷言す可からずといへども、其人格の有無論は確論也。

○佛は我及意志を一切迷とする也。耶も二元的僻見あれども、少くとも欲情罪業を迷ひとはせず、嚴肅の事實として之れに打ち勝ち之れと戦ふ也。彼れは人生

は夢也、此は事實也、嚴肅なる戰也。釋迦と耶穌との態度の差。

○佛教、禪の無我は火の滅ゆる如き、往いて返らざる無我なり、山河大地を照破する底の悟はあるにしても。

耶教のは更に甦生の我、新人を説く也。此新人の主張が耶教の力也、其樂天的の一面也。——此新人の人格を得んが爲めには權利争ひをもする也、此人格保護の衣服として權利の主張も神聖事たる也。——權利の起原。

○ 禪の我は *elation puffed up* に過ぎたる我にして正當の我にあらず、往いて返らざるの我也。基督教の「新人」的の我と異なる所。

耶佛二教の無我に對する觀念

○ 禪はアブソリュート、アイデアルを立て、リレチーヴ、アイデアルを立てず、其の行の猖狂妄行なる所以也。日本倫理彙編第一、一〇四頁參照。

○ 禪の悟の方法の一缺點は其知的半哲學的のひしろ知を滅せんとする知的方法なるにあり。普遍的といふ點に於ては耶穌、釋迦に及ばず。カントの普遍的善意説との比較。禪の生理的方面——神に合し神に充たされ神の中に没して自己を忘るゝ境涯——一面に「誰れぞ」と歩を追うて推しつめゆく手段は畢竟其によりて意識の放散を防ぎて一點に集むる爲めと……。

禪の悟を評す(悟の結果)
禪は理想上の關係より見たる神を起す、見たる神を起す、説きたる神を起す、上との關係より見たる神を起す、を説かず

禪の一大缺點は理想としての神を有せざるにあり、自己の人格を認めざるにあり、差別を排するにあり。差別に即する有のみを説きて其差別其者の神聖をいはず、即ち發展進化の有を無視す。禪の差別をいふはほんの平等に對するも附合の趣あり。

○ 誠と敬とは禪に無し、此二字は人格と人格、我と我との對峙を説く二元的宗教にあらざれば見る能はず、現實我に返らずして理想我(大我無我之我)をのみ説く禪に此二字無き當然のみ。——禪の感情觀(感情は之れを滅せずして醇化するを要すスピノザの語)事の如何にも困難なるも吾人の理想は何處までもこゝにあらざる可らず、むしろ困難をい

世界觀
善惡論

善(眞美を)含みたるを
の證は善の
る吾人は甚
み人の心を
深人の心に
與人の心に
吾人の心に
實を填すれ
ば何なる惡
如也なる惡
合足て不
滿を與ふ
空虛を與ふ

へば全く情を抑止する方こそ人の心理にも背いて困難なれ。

○ 實在のみ善也、善のみ實在也。惡は實在にあらず、其は唯善の内容の少貧なる意のみ、惡といふもの、積極的存在を説くは誤れり、惡はむしろ小善といへ、大善、高善に對して少善が惡と見らるゝのみ。されば耶教の惡魔説は誤謬也、ミルトンが此世を善惡二元の戰場と見做したるは誤れり、唯だ耶教が惡即ち少善に誘惑せられ而して自由意志を以て罪惡を犯すと見るは意を得たり。吾人には意志を謬用するの自由あり、隨つて此に責任あり、但し一面に神祐を仰ぎ其感應の力を得るは又實に我儕人類の特權也、二者は兩立

はたすか
*産火の神
永嘉の所謂
「金剛儀」

しといひ、カント尙ほ道德法に對する尊敬の情を重視せり、
禪豈全く情を撥無し得んや、情無くして尙頓悟あらんや、直
觀あらんや、實在に觸るゝは知にあらずしてむしろ情の力
也、スペンサーの所謂 *feeling* して觸れ得らるゝものゝみ。今
後の宗教倫理は情の眞價値を發揚して之れに十分の位地
を與ふると少くとも其一要件也。

神火の透徹遍在ならず、此故に我が品性に味なる一隅
一角ありて玲瓏たらず。眞に神火に溢れたるものは
一點の暗處なかるべし。

ストアの賢人論を見よ。

神は萬物を育つる火にして、又萬物を焼きつくす火也。

「それ我儕の神は燬き盡くす火也。」

○

鶯の一聲高き春日かな

神在す梅凜として句哉

野路の塵軽く颯るや春の風

○

現代の宗教
的要求

未來の宗教
非上博士の
倫理的宗教

「現代の宗教的要求」——パウルゼン博士の宗教は老衰者
に要ありとの説——安心の意義——宗教の正當の根據——
如何なる宗教を以て此要求に應ずべき。——汎神教と一
神教との比較。——靈魂不滅論の如き其末枝葉のみ。——禪
の悟及其方法——自力門と他力門。

○

電信の柱取巻く櫻かな

すみれたんぼ、木蓮の蔭の春を領す

陽炎にもつれて吹くや春の風

見付けたる庭の小隅の堇哉

宿り木の堇うつくし春のかぜ

梅の木にやどるすみれや春の風

○

二種の神
観神法を全
くは符號を
し得ず神と
直観の神と
信仰の神と
(バウレン
Ethiesp.
445)

直観の神と信仰の神と、實有の神と進化の神と、如實の神と符號の神と、無限の神と有限の神と、観神法は此二のみ。直観とは差別に即して平等實體を攫み、之れと觸るゝの意識也、其は概括にあらず、抽象にあらず。直観の神とは即ちスピノーザの substance の如きものなり、禪の「無」の如きものなり。されど吾人は此かる fineness の神を以て安んずる

る能はず、一面に理想としての差別神を要求す、基督の神の如きこれ也、人格神 whatness の神の要求は如何にしても排しがたし。之れを人的理想の衣に包むとが何故に迷信なりや、我等の理想が空華夢幻ならざる限り、最高の理想もて神を描くとは決して不道理の事にあらず。神の全相は勿論吾等の想像以上に超越すべし、不可説、不可識なるべし、而も我等が理想其者も亦要するに神の一分身ならずや、此の中に神の宿ると見るに何の誤りありや、葉頭の一團露にも尙神は宿り給ふ、吾等が最高道徳的理想の中に神宿り給はざる理あらんや、此理想によりて神の面影を偲ぶ、亦神に觸るゝの道也、此くして神は吾等が機根次第に應じて顯現すと見るに何の不合理あらんや、而してこの有限の形に顯現

するの神亦決して迷ひにあらず、非實にあらず、神は如何なる機根をも捨てずして其の百億の分身をもて攝し給ふ、鱗の頭に宿るの神亦全く迷にあらず。——意識裏に發展の神と實有不變の神——(パウルゼン倫理宗教と道德との關係参照。

○ ちる櫻咲く櫻君問ふを休めよ

○ 天つ御國の遠山ざくら

○ 神の有無、姑らく論ずるを休めよ。既に知れる神を論ずるは能くすべし、未だ知らざる神をば知識によりて論ずるは空言のみ、其は神は惟り心情の上よりのみ知らるべのみ

なれば也、單なる知識の摸索は眞に活きたる神を知るの力を有せず、有といふも無といふも盲人撫象の談のみ。必ずしも神學、宗教學を非とするにあらず、事實(宗教的意識)を知識的に整理し統一して、理性の要求を充たすは實に必用なる言を須たず、唯是等は事實其者を造るの力なきを言ふのみ、他の一切の學問の然るが如く、神を知るの力なきをいふのみ。而して既に知られたる神について、出來得るだけ吾人の理性に適合するやう之れを組織し説明するは、是れ亦没すべからざる要求なり、而も此場合理性を満足せしむると出來ずとも、即ち心證と理性との間に破綻あるとも心證を棄つる能はず、我等は二者の破綻の苦痛を忍んで尙心證の聲に耳を傾くべし、理性の解する能はざる點にも此かる

點ある場合に尙理性を讓歩せしめても心證の權威に従ふべし、我等有限の理性を以て解する能はざるも、尙根柢に濶大深奥の調和點ありとの信仰を有するを得るなり。而してこれまた理性の要求とも合ひ候、理性を超ゆるとは自ら理解の對境たらずとするも、須らく之れに讓歩するが正當なりとの判斷ヂャスチフィケーション、是れまた理性の與ふる聲ならずや、是れ取りも直さず理性と信仰との同盟ならずや、理性の權威を傷けずして而も吾人の心情を満足せしむる道に候。吾人の心は一元なり、何等かの形にて、——少くとも右いへる程の理性の要求をも全うせずば、心情の満足を得られまじく候。やさしき心情の乙女心は、雄々しき男性的理性の保護なくては所詮自立し得る能はず候、理

性の堅殻の中にありてのみ、温婉なる宗教的心情の嫩芽は十分に生長可致候。——ヤコービの言——神は *visible image* としては來らず、此意味より我等の神を見る、極めて漠なりといふべし。されど其情に於ては鏗爾として觸れたる意識あり、其 *awful presence* を感じて神よと呼ぶ時の意識は極めて實也、若しくは中心の悲哀に打たれて神よと呼ぶとさの一種感應の意識を離れて神なるものあるべしや、これ心證の一契。——神を見んとせば宗教眼を瞳開し、我が心魂を抖擻し、我が心情の深き要求の聲に聴き、一言すれば、心を清うして感應の聲を聴取せざるべからず、神を見るの法豈此外にあらんや。

要求は宗教のアルファにして又オメガ也。此にいふ要求は廣義にして感應の義を含む、或る意味に於いては一切の人事皆要求と感應との織り出づる所なりとも言ふを得。道德も理想に對する要求と感應實現作用なり、知識も眞理に對する要求ありて始めて之れを意識に現ずるを得、美術の如き熱烈なる要求即ちアート、イムパルスありて、而して神來あり感應あり、唯宗教の場合にありては要求と感應との關係が最も沈痛に發現する也。求めよさらば與へられん、叩けよさらば開かれん、の眞理は宗教の第一義諦也、中心實に神を求むるの心なくば、神は目睫咫尺の間に歩み給ふとも、我等は神と千萬里ならん、我に一片純眞の要求だにあらば神は鱗の頭にも宿りて感應し給ふべし。されば如何

にして神を見るべきかの方法は、至竟、要求の意味を明かに意識して、而して誠意以て此要求の聲を神に捧ぐるにあり。要求の意義を明かに意識するとは何ぞとならば、我等が人生百端の要求の究竟の根柢が宗教的のものなると、即ち天地の實在者に向つての要求なることを自覺するの義也。此要求の自覺に於いて、吾人は既に臚るながらに神と觸れたるもの也、吾人は要求を有すると其事に於いて、既に其漠然ながら而も疑ふべからざる神の内容に觸れたるもの也、神の衝動其者なくしては、かゝる要求其者の起こるべき理なければ也、唯要は此要求の自覺にあり、これ實に吾人理性を有する人類のみの特權也。既に此自覺あり、進んでは所謂「心を清うして誠意以て其要求の對境即ち神を求むるにあ

り、我が滿腔の愛を傾けて神に祈るにあり、靡ろの一幕を隔て、未見の而も幾分か知れる所ある神に求むるにあり、さすれば此に確かに手答へある感應、即ち鏗爾として神に觸るゝの經驗を有するに至るべし。恰も美術家が藝術欲に刺衝されて美神に祈るや、直ちに神來の感應ありて、我が知れる以上の製作をなし得る如き也。予の經驗によれば、此かる神に觸れたる經驗はいつも一樣ならず、時としては僅に神の裾に觸れ得たりと思ふとあれば、神の聲に接したりと思ふとあり、又は直ちに其慈眼溫容固より精神的に浴したる如き思、或は直ちに一氣相感應道交して、一種の生氣萬物を攝する底の意識を有するともあり、これ予の宗教的經驗の尙極めて幼稚なるが故なるべしと雖も、實狀は如此、或

は此感應の意識をもて我が要求の心の迷ひより結び出したり、空華幻影といふものあれど、フォイエルバッハ一派の如くに、其空華幻影なるかは意識の實證に參して所謂冷暖自知する外は無し。此所實に門外者の一指をも着くるの權なし、勿論悟れりと思ふもの其實眞の悟にあらずして、一時の宗教病、野狐禪又は基督教リヴァルの現象に見る如き現象なるとあり、むしろ此かる現象の多過ぎるほどあるよりして、宗教といふとが動もすれば識者の彈指を受けんとする也。されど假はつひに眞とならず、もし一時の主觀的空想ならば空想として其本性を現ずるとあるべし、而して眞の悟のみ不壞金剛の意識として残るべし、^{*}唯悟の絶對想といふとは予の否む所也、我儕は餘りに此點に累ふ

の要なく候、人或は悟の純一相をのみ認めて……悟に發達あり、早く小悟に安んじ、主觀の小信仰の殻に固着して移るを知らざるは大弊也、小安心に固まるは宗教家の弊也、此點に於ては生は耶穌をも釋迦をも絶對の信仰的理想とする見に與みせず。□小悟小信の殻を打破しまた打破し、かくして無限に其の内容を expand し度、少くとも理想といふし居候。不斷の若くしき未成品の宗教的人格こそ望まされ。

(四月十六日)

*或意味に於ては草も木も神を要求す。唯彼等は自覺を有せざる也。

*名譽、權力、富、知識、一切に對する欲望を以てするも、尙全く吾人の満足する能はざる根本的要求。

要求の自覺を有するに於いて、感應の一步は開かれ、たりといふべし。

無限の寂寞、家族も朋友も社會も醫する能はざる靈魂の孤立岑寂の感——此感を抱く所に神に向つて一步を擧げたるもの也。——偉なる靈魂ほど、此不満足岑寂の感つよく、彼れは天地の實在者を尋ねて會はざるまでは人生を荒墟の如く見る也。

未だ生を知らず云々の孔子の語は特に鬼神の□悠謬無稽を戒められたる語、死を知り神を知らずして生を眞に知り、人を眞知するも難いかな。

はつと我れ知らぬ間に交感の機あるべし、我知らず聖なる思想、權威ある實在者の現前に打たるゝとあり。

ウオーヅウオースの「夕暮の詩を見よ、嚴かなる presence を感じたる例。」

「來格は相感するにあり。鳩巢の意識。」

人道に對する熱情もこゝより湧。

我儕に灑ぐべき涙あらば、神に向つてそゞろ涙より清き貴き深奥なる涙はあらず。「友は我れを嘲けれども、我は尙神に向つて涙を灑ぐ」デ・ロブの此語は實に宗教の温情の眞髓なり。嗚呼此意識誰れと共にか語らん、嗚呼此意識詩といはんか、實也、實といはむか詩也、何等の嚴肅にして何等の幽婉、何等の崇高にして何等の煙波、誰れか此意識の深さを測り得るものぞ、其は直ちに實在より來る感應の息氣也。

*但悟と迷とは絶對的に對立すべきものか否かは予の疑ふ所、むしろ二者の間には種々の階段ありと見るが、一層宗教的意識の眞表現にはあらざるか。機根相應の悟、達磨の大悟小悟。

詩人と宗教
的品藻

詩人は其製作の中に何故に神を視るを得ざるか、製作が醇なれば醇なる程、詩人が自己のもの、自己の作爲として誇り得べき點は少きなり。其は空想の神の美しき夢なりといはむか、彼等は眞に未だ自己の靈臺に降りませる神の姿を認め得ざる者也、自ら其詩を蔑れるもの、若しくは其權威を知らざる者也。詩もし眞詩ならば其處に神の現前あり、默示あり、其は翩々たる空想の衣を着けて降りませる實在

詩人は神を

も月とし
として高
しと照
す

者なりと知らずや、此空想の衣のみを認めて、其衣の主、即衣もて包まれ給へる端嚴美妙の神に渴仰の一念を捧げざる詩人は浅いかな。何故に詩人は自己の製作に對して、時に一種壓すべからざる客觀的權威に打たるゝぞ、空想の神に此權威を附する力ありや。詩は歴史よりも哲學的也と希臘古哲人の喝破せる如く、實に眞詩の中には單なる美しき空想以上の深奥あり、而して此深奥何處より來れる、詩人自ら知らず、作家自ら作りと意識せずとせば、彼等は自ら神の前に謙々すべきにあらずや。——エマルソンの詩人論中、太陽を見たる美術家の條參照。——シェリーの詩論參照。——詩人は神の言葉を傳ふる *the organ* なり、*talent* は彼に屬し、*genius* は神に屬す、神の有を神の有として自ら謙する詩

人は一種の品藻ある詩人と稱すべし。此かる品藻の有無は以て詩人其者を撼かすに足らず、快樂詩人、無神詩人も詩人としての價值に一毫の輕重あるべきなし、唯此の如き自覺を有する詩人あらば、我は詩人としての技倆以外に敬慕を拂ふに堪へざるを思ふのみ、我詩壇亦一人のウオヅウオース、ブラウニングの如き詩人を有する、亦快ならずや。

祈禱

我儕亦要するに神の顯現の一分身なりとせば、我れ如何に小弱なりとも鈍根なりとも神の大靈の光明の一綫は明かに我が人格の中に通へる也。我れは此靈魂の光明の窓よりして神と相感應し、相道交し得る也、我が嘆きの聲、悲痛の祈、感謝、讚美の歌は、此一道の通ひ路よりして天に上り、神

の御座に達しつゝあるを疑ふ可からず。神はスピノーザのいふ如く我等がいふ如き理性や悟性を有するものにあらずとするも、神の理性及び悟性の我儕のと相異なるは、猶吠ゆる地上の犬と天上の狼星との差異の如しとするも、我儕が究竟神の一分身たる限りは、我儕の要求や祈禱は何等かの形を通して一氣神と通徹する所ありと信ぜざる能はず。是れ予の否一般宗教的意識の經驗あるもの、確信の一也、我は神の賦せる口を以て、手を以て、聲を以て、形をもて神に訴へ神に祈る、而も我儕の如き耳を有せざる神は、尙ほ我儕の聲を明かに聴取し給ふなり、否な我儕の如き不完全の耳とは異なる一種の耳をもて聴き取り給ふ也。神に口もて聲もて心情を訴へ祈るとが何故に迷信なるぞ、勿論感^{*}得ては之れ

を迷信と見
き今は宗教
の大切の眞
理と存候

覺的に口に出だすと否とは問ふ所にあらず、心聲の聲其者を訴ふるの謂也。

神在ますか否かの問題の如きは、小生の以上の所陳に多少の實ありとしたまはゞ解決せらるべく候。所詮人を離れて神は見られまじく、自己の意識の窮極の實證を離れては神は語り得らるまじく、自己に沈潜する深ければ深きほど神に近づくべく、實に此内觀の美を成すものは何處からが我にして何處からが神なるか、分明せぬ消息に觸るべく候。神在の最も有力直接の證據は自己の心識より外にあるまじく、少くとも小生に取りては自己を通して神を直覺するとは、自明のやうに感ぜられて、何等の論證をも要せざるやうに存候。

するも理性の活動の境域の擴大と共に宗教の境域亦擴大すべく(望遠鏡の進歩と共に星界のますく擴大する如く)兩々相併進して窮極なかるべき也、コント一流の见解の如きは誤れる哉。

○ 春雨や合ふ傘に美しう

おぼろく櫻や人や鐘の音や

櫻咲いて桃咲いて春は涙哉

美しう山を出てたり春の雲

○ 春

車上の美人 ○梅林の星夜 ○花への謝罪 ○春堂の

禪思 ○たんぼしの樂意(春興日記)

一物あり、無色無相、無聲無臭、而も一切の智慧徳相を具して無量の法音、無量の壽……之れを無依真人と名づく、此實在の勢力に刺衝されたるものは、此れに向つて歸命頂禮、歸依讚歎、禮拜崇敬せざる能はず。此無位の真人は身を百億に現じて、萬機根に應じて、洪纖さまぐの聲を出だし給ふ。譬如迦楞毘伽鳥、在磬中時有大勢力、餘鳥不及。

○ 宗教的信仰は詩よりも尙常途の役々を化して莊嚴海たりしめ、一切價値の轉倒を現ぜしむ(恰も夕暮の黄金色の斜陽が、農夫も牛羊も黄金佛と飾る如し)。詩はシムボルなれ

ど信仰は實也、シムボルを顔色無からしむるほどの實意識也、我等は此大轉換に刺戟せられて、常に光明の世界に住むを得る也。

○ 青葉して瀬々に肥えたる小鮎哉

實體の直觀

吾人が主客觀を別つは、既に二者の對峙を没したる一如の實在の知識を豫想せる也。個物といへば既に平等、不完全物といへば既に完全物を豫想せる也、否此かる觀念の對峙を超越せる one を意識せる也、直觀せる也、吾人の一切觀念、一切知識は限定觀念也、限定知識也、或個々の觀念を没するに於いて、既に一切物の實體を含める也。此かる實體

*これアソセ
ルムス等の
實體論證也

の存在なくば個々物の存在を考ふる能はず、知識上の關係順序よりいへば個々物より實體に及ぼすなれども、存在上の關係よりいへば、……否知識上の關係よりいふも、吾人は個々物を個々物として考ふる時には、既に實體を暗に意識し居れる也、論理は唯之れを明瞭にするのみ。實體の意識は自明の直觀也、個々物に即して同時に直接に直觀し得る觀念也、スピノーザの substance は即ち此類の直觀也、存在すとより外考ふる能はざるもの也。

神の人格論

神の人格觀ありて宗教あるにあらず、宗教ありて其の意識の必然の結果として人格的觀念の生ずるのみ。人格の有無如何は宗教的活機に關係なし、唯宗教的活動のある所

には、多く神が人格的高調を帯び來るといふのみ、むしろ宗教的意識に伴ふ一現象として人格ある也、無くとも吾人が之れを造る也、宗教的意識全體の中の一意識のみ、此觀念は第二義的也。

○
不^な忤^ち不^む求^む他^ををそねみ嫉まず、又羨み求めずして、自家本分上の性を盡くし、量を盡し、科を充たすべし、此からは槿花一朝の榮も千歳の松の榮えと其神の眼には一なるべし。朝に道を聞けば夕に死すとも可也、我が性を盡くす事に永劫の生命は存して時の脩短はこゝに超越し得らるべし。盡性は觸實躰也、無限者との合一也、眞生命との接觸也、人火と天火との一源となる也。——神は今日野にありて明日爐に

投げ入れらるゝ花をもかく装はせ給ふ。

○
莊子の所謂倚心、釋子の所謂流注想を斥けて、心火を其の起□の幾微に束ねて、其穗先を散亂せしめず、未識境より噴出する一道の心火の本を太く強く一筋に直上するやうに束ねて養ふが即ち敬の工夫也、常惺々法也、こは儒教の主觀的工夫也。致知格物して仁義禮智の意義即ち理想を忘るが其客觀的工夫也。

人生問題の一面
○
信仰を以て漫に知識的要求を壓する勿れ。大疑の下に大悟あり、疑ひ疑うて極まりなければ、疑其者に存する一種の實在に撞着すべし、必しもデカルト的「我在」の飛躍をいふ

にあらざる。大要求の下に大感應あり、要求しつゝて已まざれば要求其者の中に神在の大見得に達すべし。前者を悟といふ、知勝ちて信伴ふもの、後者を信仰若しくは感應といふ、情勝ちて知伴ふもの、悟によりて安立するもの、信によつて安立するもの、此二道以て安心立命を盡くすべし、哲學者もしくは理性の直覺を重んずる禪家の悟は前者に屬し、情意の要求を重んじて歸依信樂を生命とする宗教家の信仰は後者に屬す。——哲學者と安心——理と信——情意の要求——「求めよさらば與へられん、求めほど普遍にして深奥なる事實はなし、一切物は皆一種の higher life に對する向上（エマルソンの言葉を思はしむ）にして、其窮極の指は天上の一月にあり、神にあり。此要求の意識を有する者は幸なる

哉、此の要求の深さを掘るものは心源當下に神と見るを得べく、要求の之源を鑿つものは神を鑿つもの也。實に古より、一切の靈は喘ぎく、言ひがたき中心の歎息を以て我が眞の姿を見むと望みつゝ、此文明といふものを作りつゝ、奮闘しつゝ、進みつゝある、大いなる沈々たる世界大の聲を聴かずや。此の要求、望の權威を擧めるものは神の感應に參したるもの、信仰ありて望みあるにあらず、むしろ望みありて信は生じ來る也、soul of souls と相抱かんとする無限の要求ありて神ははじめて我れの事實たる也。愛ありて知あり、限りなき思慕情悦の情ありて心眼燭かに、靈覺明かに、其處に會て知らざりし至上者の大靈の立ち給へるを見る也。我が靈魂の窓を開きて神を見せしむるものは要求也。

「愛は知識を完うす」

超理の二意
破——智識
的超理と情
意的超理

パウルの「道徳と
宗教との關
係」

カントもニ
ユートンも
其世界觀人
生觀を眞
理に近ハ
イホシス
として供し
たるは未了
の神祕發

愛也、思慕情悦也。——全人の要求——懷疑と知識——知識
の爛らし得る所は要するに事物の皮一重のみ、一重くと
剝ぎゆきて尙窮極知り盡くす能はざる或物の残るは知識
の性質也。玲瓏徹底といふも、知日の照徹には尙底ひ知ら
れぬ闇影あり、是れ事の關係を押し擴むるに過ぎざる倫理
智の必然性也。されば當下絶對を攫む直觀智は如何とい
ふに、是れはた未だ一種未了の黒點を心上に残して「全人の
満足を買ふに足らず。此缺を完補するものは情意の要求
より出づる信仰也、歸依也、依屬也、生命の溫き呼吸に觸る、
也、soulとsoulとのcontact也、これ「見ざるものを信ずる也。
これダーラの“*The greater blessing that can befall a thinking
man is to fathom what can be fathomed and silently to adore the*

てれる念
敬虔の念
をせしな
るべし
へ「ゲル
傲語も尙
點の不足
ありカント
如きは實
神を見入
安んじ
とせり
宇宙の無
智なる無
單なる大
天的の異
宙の妙工
歎ずるは
其無限の
我れとの
係を識し
賴し其力
の情を生
るに至つ

unfathomable.”の語ある所以也。而して此の肅然として畏
敬する信仰する中にも理性の満足あり、今は分らぬが後に
分明すべし、今見る所は鏡にて見る如く、臙ろなれど面のあ
たり見るの時あるべしとの満足あるべし。又理性にては
到底分らずして而も情意の趣味をも味うて解すべき者も
あり、此方面は縱令理性にて洞然神を透見し得る時ありと
も、神の一面は尙依然として情意の對象たるを失はず、宗教
の信仰はむしろ後者也。知解にのみよる人は情意の要求
より神を見る人を迷信視せんとする傾あり、大謬也。——知
識の底に歡美あり、知極して言語同斷、心行所滅の境に至ら
ば、妙法と稱し、摩訶不思議と讚するの外なし。此に至りて
は、理觀は極して無限智に對する畏敬の情となる、此れ既に

とも現道徳原理に代るほどの新理想を有する者にあらざれば現道徳と逆行し、之れを破壊する権利無き也。道徳法なるものまた實に人類の創造力が造りいだしたる最善美の本能也(シヂウィックの語参照)彼等が下劣なる本能満足に苦痛を興ふるほどの力となり來れる也。高さものを以て卑きものを打ち破る處に詩人の高貴あり、卑きもの(本能自己満足)を以て高さものを形式と呼び、偽善と呼ばはるは、彼等が一代人心の同情を失ふ所以也。道徳的満足は形式的満足にあらず、高さ本能が卑き本能に打ち勝つ満足也、若しくは高さ本能たらんとする、即ち理性の掲ぐる理想が卑き本能化されたる理想に打ち勝つ満足也。要之道徳其者には實躰に觸れたる憂然の□あり、カントが天上の星と道徳

法とを敬せしは此故也。——彼れ詩人豈道徳的理想を蔑せんやといふ、然り事實なるべし、されど彼等の陥り易き弊は主觀的小理想にして、一代を掩うて極を立つる大理想ならざるにあり。カールライル、ラスキン、ゲーテは此を立てたり。——所謂自家満足はカントの公式の如く、同時に萬人の満足する所なりと意志し得らるゝものにして始めて證權を得べし、不然ば一味勝手道樂のものたるべし。他を見ず、社會の共通善を見ずしての自己満足は、到底自己の満足を買ふ所以にあらず。——不孤君の實體の満足とは何ぞ。

罪惡の意識
の苦痛と解説
雜記其四參
照

然らば如何にして此罪の傷痕は痊やさるゝか、唯だ神に訴へて神の無限威信力の感應を得るあるのみ。我等誠實

に涙を以て神に謝せんか、神の海の如き慈眼攝護の手は下りて和解の觀喜を得、且神の最深の攝理のある所をも聽くを得て、萬法皆善、我が罪過また神の榮光の一表現なるかなと叫ぶの意識あるに至る、而して一段の喜悅と勇氣とを以て新生涯に上るを得る也。罪は我れにあり、我れ以上の神に隣れば罪なし、神の力は我が罪を滅して春雪の如くならしむ。

編者曰、本書四一四頁、牛生の苦悶云々の條參照。

○

人生問題の
一節以上は
事實といは
れずといは
れぬ、既に
獨斷也、人

ポジチヰズムの見地に立ち、人知の達せざる事實以上の境を知るの要なし、知れるだけの事に安心すればよしといふ(ミル、コント、元良氏の如き)如きは、これ知識以外の情の要

知を限るは
人心の要は
と合はざる
と科學者だ
又經驗以上
の理法を假
定するにあ
らずや

求の痛切なる意識を経験せざる人也。情の要求の權威を感ずる人は、此に如何にしても知の要求以上の安立の根據を得ずんば止まず。——詩的として漫に情の要求を排するもの、謬見——詩と實との關係を論ず。

○

清澤氏とは哲學上、倫理上の見地は異なるやも知らず、殊に倫理と宗教との關係に關して、氏は宗教を超倫理として善惡以上の實在、惡人の信仰安心、差別よりも平等に重きを置かれたるなどの點については、悉しく所見をいへば異見なきを保せず。宗教は差別の倫理を超越するも、そを無頓着視し、無記視する狐禪的悟は予の取らざる所、宗教的信念の旺なる程倫理の感はエンハンスせられ、溫められ、鋭くせ

られて、益々差別界の規定を敬重するの念に培ふべき也、然らざる宗教信仰は偽物也。——唯氏と宗教上の經驗上合する所不尠。——予は精神主義なるものを知らず。

○人に對する信——兒供の誠——エマルソンの言葉。○宗教の心髓は神と共に、住の意識にあり。何をか神人の和合といふかとならば、神の導きに任せて我の全を盡くす也。——諦め主義の眞意義。

○我にあるものは神にあり、否我れの理想のフルフィヤルされしもの即て神なるが故に、否此く信ぜざるを得ざるが故に、我が無意識に我が姿、我が理想に似せて造りし神は、やがて眞の神の少くとも一部也と信ぜざるを得ず。耶穌の愛の神は、耶穌の人格の無意識の反射

として造られしものといふは可、而も其れやがて空想にあらずして、眞の神の一部を最も高き一部を彼れが偉なる宗教的直觀もて發見したる也。直觀は發見也、人はつまり自己の人格機根以上の神を見る能はず、されど其はたゞ、感じたる神は實在の神なるが故に、感應は此に行はるゝ也。

○

宗教問題

- 一、人生論か——人世善乎惡乎——惡の起原問題——利己か利他理想性——自由性
- 一、宗教的眞理の性質
- 一、知識作用と神
- 一、神とは何ぞ
- 一、有神論證
- 一、ボヂチギストと神
- 一、自由意志論

- 一、凡神論と一神論
- 一、善惡論
- 一、眞個の宗教的意識—— 耶穌、釋迦、スピノザ等 —— 將來の宗教
- 一、宗教と科學
- 一、宗教と詩
- 一、永生とは何ぞ
- 一、人生問題と宗教
- 一、倫理と宗教
- 一、耶教と佛教との差
- 一、迷信論等

充實の意識は自足他に須つなき圓滿完了の意識也、大満足、大平安の意識也。此自足の意識を眞に味ひ得るものは眞に宗教的生命に入りたる人也、此自足の意識ある人にして始めて他の苦痛、罪惡、缺陷を救ふの權利ある人也。此自足の實驗を十分味ひ得るに至るまでは、他を救ふよりも先

づ自己を救ふが順序なり。

差別見に執する間は我等は此宇宙人生に於ける種々の矛盾を解く能はず。一たび神の自觀に與るを得るに至れば、娑婆即寂光淨土、穢土即莊嚴國となりて、一切の物皆神光赫耀の姿を帯ばざるは無し。此平等觀を與ふるものは宗教也。

○ 祈禱——バスカルの言葉。

○ 信ずといふことはどこまでも無疆に其力其徳を信じ頼むと也、彼れ我を殺すとも我れは彼れに頼り頼まんの無限の信賴也、信ずる師友には如何なる事をも疑

はず、惑はず、打ち任す也、況して神にをや。神の仕向け給ふ事は皆善也との信ありて眞の諦主義となる、諦主義は消極的にあらず、一切永劫の神の意なりと信じて神の限りなき智慧の照鑑に打ち任すと也、スピノーザまた此信の上に立てり。此信ありて喜び生ず、難有し、辱しの念、優なる思ひ常にあるべし、又所謂「如來の仕事」を竊まざるが故に心軽く荷輕し、過去の失行に對して無益の煩悶をなさず、神の聖意に歸して感謝の念に安住し得る也。現在の仕事に於ては神と共爲の意識あり、神其半分を受持ち給ふが故に、從來の一人ですつかり荷つてゐたやうな苦痛なく、何となく輕くと易くと出来る感ありて、一段の喜びいつも中心にある也。

○經驗なきもの、前には宗教的眞理は豚に眞珠、猫に小判也、經驗あるものほど佛典、バイブルに多くの新しき意味を讀み、天地人生が盡きざる趣味の源となる也。宗教眼なきもの、眼には天地人生は塊然たる物質の塊のみ、孔夫子が水を觀ての歎美、仁齋が琵琶湖を觀ての言。

○神在と美觀——主觀にあると共に其れが直ちに客觀的實在たる也、美の如し。神の擁護の温かなる手に導かれる感じの如きも、之れを感じるものには事實として客觀的權威を有す。理よりしていへば何とも言ひがたし、唯だかゝる感じは理の如く強ふる譯にゆかず。

○ 感情の細かなるものにあらざれば、宗教の眞理は解せられじ。テリストの疎雜なるものは、美を味ふ能はざると共に、又宗教をも味ふ能はじ。宗教は一面詩也、古來の祖師皆一面詩人也、耶穌、釋迦、法然、親鸞、皆偉大なる詩魂也。唯だ彼等は宗教的眞理を味うて、炎々たる實に觸れたる刹那に無意識に詩を得たる也。一步實より回頭せば、彼等直ちに其詩に恍惚たりしならむも、彼等は毫も之れを詩として味ふの餘裕を有せざる也。彼等は詩を實として強く攪める也、彼等の意識には、實在の聲鏗として響ける也。詩人は然らず。

○ 世の宗教家は宗教上の信仰を味ふとを言つて論理の關係を味ふとを言はず、むしろ論理としいへば一概に宗教と沒交渉と見て之れを排せむとす、謬れり。宗教の事味ふに足るといはば知識の事また何ぞ味ふに足らずといはむ、理性の權威また實に信仰の權威に劣らざる力あり。信仰に窮極の位地を與ふるもの理性なりとすれば、理性の權威決して侮るべきものにあらず、眞に理性の權威を味はざるもの、信仰の味また淺しといふべきかな。唯理性の内容の味と信仰の内容の味とは截然として別也、一を以て他を沒するは非也。

○ 平等即差別、差別即平等とは唯だ實在の相を言ひ表した

るの語に過ぎず、如何にして、又何故に、平等が差別となり、又差別が平等に統べらるるか、は更に解釋を要する問題也。佛教にては此問題は釋けず、如何にしてを解くものは機械的進化論也、何故にを説くものは理想的進化論也。

○ 眞如の性徳を主觀より論じて是心是佛、是心作佛といふと、客觀より論じて當來普照、攝取不捨といふも畢竟同一也。

○ 神人の關係——人が神に對する態度即ち宗教のエッセンスは、依願と信樂、從屬と自由、謙虛とエレベーションとの二感情の調和にあり。バウルゼン志か説き、フライデレル亦其著 *Philosophy and Development of Religion* P. 35 にきか

ふ。

○ 人に對する眞情の粹が神に向へば宗教心、神に對する眞情の粹が人に對すれば道德心。道德と宗教とは相照らし相全うして相差はず。

○ 我れ神に對して、すまぬ、かたじけなしの懺悔心、感謝の情の起こりしは、全く神の導きと信じて此に……。

○ 知識論——*matter of sense* を *combine* して之れを整合統

一する形式の標準は何處より來たる。 *sense* にあるか、*self activity* にあるか。カントは之れを我が心の自家活動にありとして主觀的觀念論の立脚地を取りたれど、反省すれば吾人は擅まゝにかゝる標準、ノルムを造りいてたる自

セシス其者
が a given
thing 也、
與へられた
るもの

覺なし、唯だ與へられたる事實として之れを享け入れたるを知るのみ。夢や妄想やは吾人自ら作る所なれど、吾人は之れを是正し批判する或客觀的原理を有する也、自家主觀の自由にし得ぬ自家以上の權威あるノルムある也。是れは sense にあらず subject にあらずとせば、二者を超越する綜合的原理、共通的原理と見ざるべからず。此共通原理によりて sense と subject とが相結合する也、物と心とが一致する也、其最高統一者即ち神也、絶對的觀念論となる也、ゼント等のいふ「活動原理」也、觀念の活動が神也。之れを兩端に押し見て見たるもの即ち物心也、活動的一元論は窮極觀念的也、物心は觀念内の區別也。

宗教の知識
論的根據

知識論の
プラトーン
の lofty
idealism
大に眞理あり
其の模範觀
念は人心に
再現する也
プラトーン
の宗教的
哲學一
頁參照
七頁以下
アラト
神は自
思の神に
て自己を考
主觀として
別外より
配對する
の對峙を
つ道徳的
志とせし
は現活動
原理其實

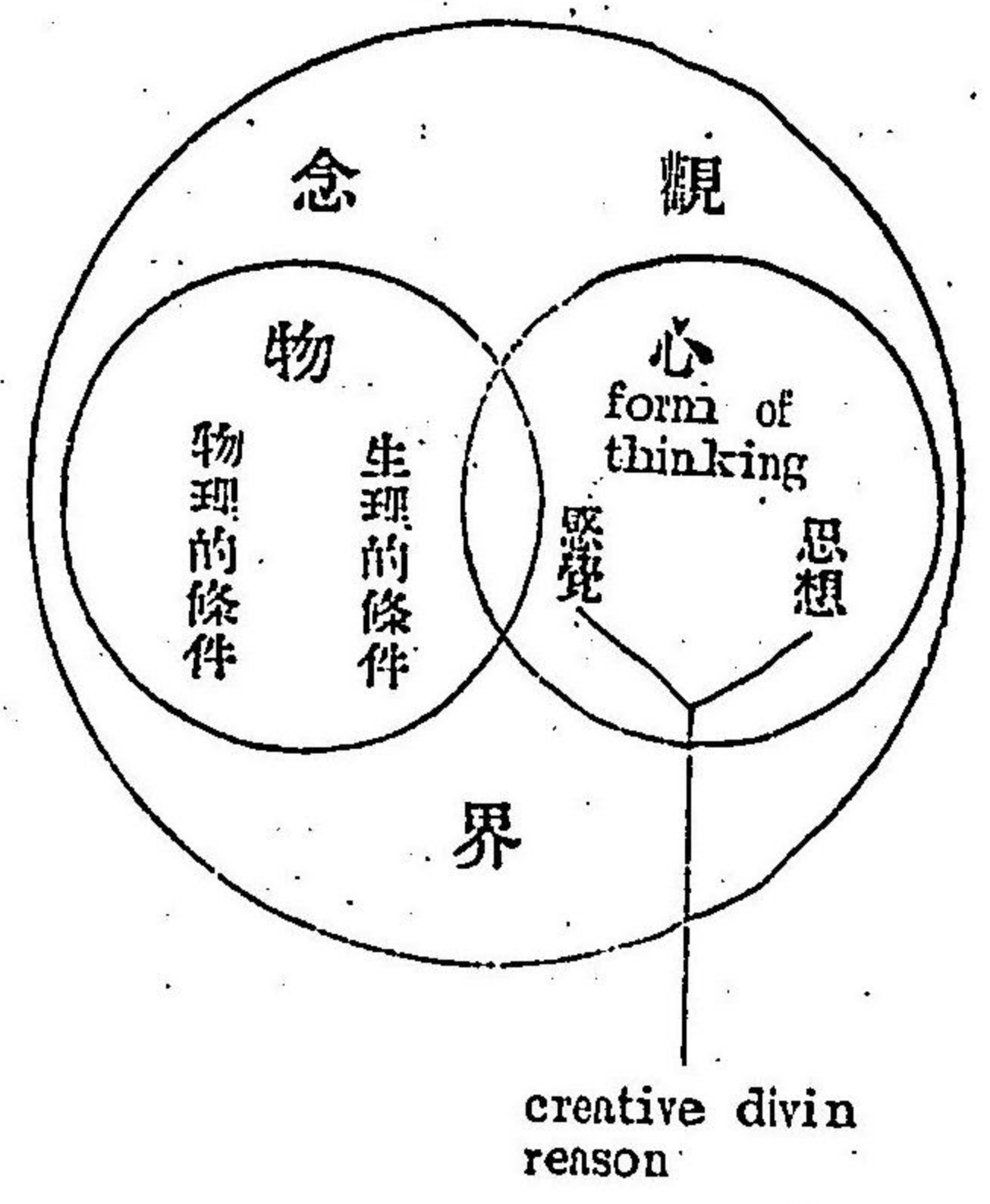
Form of thinking 既に creative divine reason の所與感覺也。

我が主觀以上の境より來たれるもの given facts 也、thought に先きたる previous thought の顯現也。既に realized thought が再び我等に考へられたるもの考へを考へたるもの也。 sense の客觀的條件たる物質分子の振動、空氣の波動等又 subject を離れたるものにあらず、狭意の心界以外の外界なれど其は又同じく觀念界、想念界の物、物質分子の顫動、空氣の波動などの考へに上らば、これ即ち主觀がかゝる組織調整を與へて見たるもの、否其は矢張主觀以上の客觀的統一原理の附與せるものにして、心と自然と、内界と外界とを繋ぐもの也。

にあらざ、客觀に對ら
れて自家觀
照に耽る神
也、智的美
的神也、フ
イロテマ
太豫言者、
道德的神、
道徳的、
あらす

我觀錄

物が我以外のものと思はれて而も我れ以内のものと思



はるゝは、即ち遠き所あると共に親しき所あるは畢竟二者
を統一する觀念の原理なれば也。物も心も觀念界裡のも
の也、心物の二元は神觀念といふ一究竟原理によりて調和

す。ハルトマンの知識論参照。

善惡觀念の
哲學的説明

實在が意識に入れば善、虚無が意識に入れば惡、故に惡は
實にあらざ消極也、虚無也、惡を行ふものに空虚の感あるは
此故也。唯だ虚無に向ふ意志のみは實在也、惡の實在はこ
の意味にて語るべし、つまり理想(實在)の negation が惡なり。
ある可らざる事をあらせんとする故に惡あり、あるべきと
のみ實也、これに逆行するが故に、惡に空虚不満足の感胸底
にある也。善のみ充實生活也、稻妻の自白考へ合すべし。
惡と意識せずして爲すものは誤視也、ブライデレル「宗教哲
學二一八、九頁以下」藤樹云「善惡の實躰は心の上にある也、事
跡にあらざ、一念良知に至るを善とし、一念道に離るゝを惡

とす、まかるときは善惡の合戰可有理なし。

○

編者曰、この處に『證道歌』の全文を載せあり、其中の「樂有著空病亦然」の一句に就き左の語あり。

佛教の有は空の有也、消極の有也、無極の有也。我が所謂有は有の有也、積極の有也、太極の有也。

○

梅

夜の領に句流れて、
闇和ぐる老樹梅、
花囁けば星瞬きつ、
戀かそも神のまじらひ、

人の世の夢も清かれ。

二つ三つ星は急ぐか梢、
ゆらめきの喜びまろく、
かすかなる歌もたゞよふ、
やがて寂寞あかつきの、
見よ凜として花に榮あり。

○

句深き林の中に
月のこゝろを辿り入れば
聖なる思胸に充ちて

雜記(其五)

我觀錄

木の葉木の葉に咲く光
老ろがねの言葉と流れつゝ
此身このまゝ、靈の海。

○ 筆を載せて北海道に入れ、る人を送るとて

○ 北溟の大野を遶る神の氣息に

燄の筆のゆらめく君か

○ 北溟の萬古神祕の森の靈

筆の手力觸れよ君今

○ 北溟の空千里雲低く

新愁遠く君に曳くらむ

神論と一

○ 凡神主義には樂觀と厭世觀との二面あり。前者にては自然其者を神化する自然説となり、後者にては一切現象を一實躰の一波一浪と見て夢幻視する厭世觀となる。一は自己を神と同視せんとし他は自己を幻影視せんとす、此二面を調和結合するものは内在の神を説くと同時に、自然に神の理想の一貫を認むるアイデアリズム也。顯現の神は神の全にあらざ、神には自然を超越せる一面あり、超越しながら、差別界の一切を、其の一元に攝して、統一的原理となる也。神は中世紀の通性論者の如き抽象的概念にあらざ、神は通性にあらざして統一的全一也。スピノザは神の内在性を見て超在性を見ず、又其をサブスタンスとして必

雜記(其五)

然的機械觀に流れ其のアイデアルサイドを見ざりき、彼れのリシグチーシヨンは消極的也、理想として向上的にリザインしたるにあらず。

○一面にては神を自然の個々物に没し、一面にては自然の個々物を神の中に吞み了る。神を自然の個々物中に没了するが故に、個々物を統一して之れを活かしむる原理としての神を見ず、自然即神にして自然主義ナチュラリズムとなる也。

○自然を神の中に吞了するが故に一切個物は一サブスタンスの現れ、一波一浪に過ぎずして其れくの價値と意義とあるにあらず。

○スピノーザはコーザル、メカニズムとしての自然を

見てリガング、ユニファイイング、プリンシノルとしての神を見ず、エンド、ポジツチングの神の活動を見ず。

○凡神論は天地万有を横に見るもの、故に一貫の公式的實躰を見て個物それらの特殊の位地と價値とを見ず、一神のあらはれとす。一神論は萬物を縦に見る、故に神を有機統一的原理と見て一切個物の價値を見る也。

○ 予輩の所謂寂然觀照の意義。

○ スピノーザのファイエチズムには resignation ありて trust なし。これ其の自然論の一面より來たる。

○ ポーロ曰く「神より出て神に倚りて神に歸ると。神より出づるは流出論也、神に歸るは進化論也、神に倚るは内在論也。」

人格論

○ 哲學上よりいふも實在を寫象するには意志と理性とを具へたるものといふ以上に出てず、これ吾人の知力の到達し得べき極也。されば宗教上の人格は理論上の根據に合すといふべし。

死の感

○ 死とは何ぞ。

自由意志論の一節

○ 極端なる意志自由説即ち absolute indifference を主張

せるスコートスの如き見は維持し得らるべくもあらず。意志すといへば既に意志の内容を臚るながらに含む、何等かの内容となり目的となるものなくば、意志の作用は起こらざるべし、意志は自家を決定するものを自己に含み居る也、自己が自己に決定さるゝ是れ眞の自由也。意志が自性の則に従うて動くは自家決定にて、眞自由こゝにあり、而してかく意志を決定する自己なるものゝ種々の異に従つて意志の自由の働きに高下の別ある也。如何なるものも一種の自己を有せざるなし、天上の星も一種の自己を有す(マッケンデー参照)。意志の争ひに關してトマスとスコートスとの論いづれも中正ならず、此點論明を要す。(大西博士

哲學史參照

スピノーザ
論の一節

○ 祝福觀に關しては西哲史スコートスの條を見よ。トマスは神を知るより愛生ずといひ、スピノーザ亦然り、此點批評を要す。

平等と差別

○ 平等と差別との關係はニコラウス、クザヌスの説、意を得たり。「差別は神を開きたるもの、神は差別を疊めるもの、故に差別界の個々現象の消滅し *passing away* したるものと見るは、唯だ差別界の事にして、エッセンシアリに然るにあらず。眞實は唯だ神に疊まれたるまで也、かく見て一切の消極觀を破るに足る。

○ 大西先師を思ひ出て、

神の殿みやに今は飾りの君がたま

○ 今宵の星のさやけさ一つ

○ 月今宵沈黙しんもくをそぐ庭のおも

○ 光の中に深さく我れ

○ 如何なれば若き血潮の今宵われ

○ 戀にはあらず許せ月姫

○ 照らされて君が涙の月の顔

凝る白銀の女神うつくし

人生問題の
一、悟道と
信仰

○ 安心の極は悟にあらざして信にあり、知解にあらざして情解にあり。されどまづ悟の基礎なくしては信の火は堅實ならず、安立其極に達する能はず、悟は信の豫備條件也。悟の要求も出來得るだけ満足せしむべし、然らざれば信に空虚を生ずべし、二世の知識の水準以上に立てる信ならば、信や未だ堅からずといふべし。知は到底關係的のもの也、直觀知の一躍といへども其が知的方面をもて勝てる限りは、到底實在を面のあたりに如實に見る能はず。禪の見性直指もニコラウス、クザリヌスの所謂、有意識の無知も眞の徹底といふべからず、其の一端に鏗爾として觸れたるは

知れりと言ふよりも知らずといふ悟りの本質也、要諦也

感應といふ恩寵の結果は力也愛也力と愛とが安心の窮極の秘鑰を握れる也、神の國は力にあり

否むべからずといへども、尙心下無限の空虚あるべし。たとへば藤樹が大覺明悟の人は現世の事は申すに及ばず、生前死後のことわり天地のほかの道理まで、白晝に黑白をわかつかく明かに知り給ふといへる如きは、一種の儒者氣質、悟道氣質の言として聞くべくも、其獨斷に理を附會して兎も角主觀の安心を云へる以上正直の表白とは受取れず。信仰に至りてはわが心情の要求より聞く感應に一段の深ささとりあるべしといへども、其の感應の内容は人々の機根に應じて無限なれば、ボーロのいふ如く猶ほ到底おぼろを免れず。

○ 自然は因果の波の必至界なると共に一面生命をもて横

溢す、是に於てか自然に詩あり、光明あり、神ありて一貫の理想を見るを得る也。自然の生命に觸るゝものはその生命の fullest reality たる大源に向ふ渴仰なきを得ず、此に於いてか努力あり、向上あり、道徳あり、宗教あり。而して假りにこの太源に同じて萬象を下瞰し撫育するの意識に立ちて美的觀照は起る也、觀美こゝにある也。——スピノザの靜觀は必至的、物質的冷枯也、彼れは生命を見ずして因果をのみ見たれば也。

神祕主義

神祕主義は宗教のエッセンス也、信仰の深き内的經驗の發表也、古より宗教の墮落枯乾を防ぎて之れに生命を吹き入れて新生せしめたるはいつも神祕論者也。(ブライデル

ル哲學史七五頁以下參照。)

宗教と科學との衝突及一致史についてはブライデルの「宗教哲學」を見よ。

宗教と道徳との衝突一致史についてはブライデル五頁以下參照。宗教が道徳の基礎たり動機たる事實史については、同上二一八頁以下參照。

○
ゲーテの宗教の根本的感情發表の語。

“Small do I feel myself within the infinitely great.”

——Goethe.

○
フィヒテの宗教感情發表。

我觀錄

In the work entitled 'Guidance to the Blessed Life,' Fichte described religion as the view of the world which rises above morality, which perceives the divine life in all the manifestations of the true and good and feels it in ones own self as the power of holy living and loving——as a calm inner mood in which man feels himself animated by God's spirit, and surrenders his selfhood to God will and from which there springs joyous and active love of ones neighbour.

○

スピノザの神、フッサリアソンの神

神の觀念について。(第一)靜觀的神——ブラトーン、アリストテレスの知的美的神(第二)活動的神——フィヒテ、猶太預言者の道德神(第三)一切を抽象せる無世界的バラモン

佛教、エレア派的神。神の觀念の發達についてはブライデル宗教哲學の中 The Belief in God を見よ、殊に一三四、五六頁を見よ。

○

バラモンの抽象神「ブライデル」宗教哲學』一四、五頁參照。

○

我が有する醇眞の愛情の中に神の愛の反響を聴く。我が心情の叫びは一々神よりの反響をもて伴はる、ウォーヅウオースの「エコー」の詩を想はしむ。我が愛其者が神の愛の内在的發現と感ぜらる、我が愛即ち神愛の我がうちに働ける也。我等人を愛するとに於いて神の愛に與るを得べ

雜記(其五)

し。

○ スピノーザの批評についてはブライデレル宗教哲學一三〇頁以下を見よ。

理想と現實

○ 理想は現實を基礎とせるもの、然らざるは實現の不可能なる理想即ち空想也、理想は二元的に外より來つて現實に對するものにあらずして、現實の中より出て、現實を含み、更に其を超越して其が標的たるもの、故に理想(人生の又道德の)は實在の根據たらざる可らず。世界のグラウンドよりするものが如何にして人生の目的たるか。吾人が理想を追ふは單なる道德上の假定として追ふにあらずして、其

を既に現實の中に見、又將に現實ならんとするもの、中に見んとせる世界の原因即ち神を追ふ也。(ブライデレル一三四頁以下参照)

○ 理想と現實との關係についてはブライデレルの「宗教哲學」一七八頁以下確論可讀。

○ 單なる理想は客觀的實とならず、單なる實は理想とならず、こは唯 real-ideal にして ideal-real なる神の發現と見て解くべし。

○ 因果の關係はたらきは、諦視すれば普通想ふ如く一勢力が一物より出て、他物に移り、更に第三者第四者に移りゆくにあらず。(萬物一體の living unity によりて説くべし。)

因果とは何ぞ
ブライデレル
一五〇頁參照

猿より人
間を説かず
して人間を
りて人間を
く方猿を説
り

進化論の短評、グライデル一五五、六、七頁を見よ。下なる者を以て上なるもの、原因として之れを説くは誤れり、むしろ上なるもの高さものを以て下なるもの低きもの、原因根據として之れを説くべし。物質より生命精神を説くは誤る、物質は生命を發展せん準備一阶段として見るべきもの、其れが生命の原因にあらず。原因は初めにあらずして終りにあり、目的にあり、目的が原因にして之れが物質と現じ生命と現じ精神と現ずる也、即ち物質は唯だ生命發展の縁たり踏臺たるに過ぎず、唯だ物質は生命をforeshadowし、萌芽として潜勢として含めりとは言ふを得べし。然れども顯勢となれる生命と潜勢としての物質とは、余然異原

*此意は、土原のいふ、石を得べし、物以上、或物以上、一家以上、無歩展の現、神原とす、也

進化論と神

理なり、異概念也。生命は物質以上の發展なり、原因窮極のグラウンドは神なり、萌芽といふ意味は一物の中に神の全實在が、ライブニッツのモナッドのやうに縮寫せられ、宿されてゐるの意。猿の中には人間と發達すべき或物の素を含めるが故に猿を人間の原因といはむか、此は猿にあらずして猿プラス或物が人間の原因といふと同じ。物質に含める物質以上の或物を生命又は精神の原因といふは、これ取りも直さず物質以上の或物を生命、精神の原因と見たるもの、唯だ一は巻き見、他は披きて見たるの差のみ。生命を生命の原因といひ精神を精神の原因といふと同一也、つまり神を原因と見るのみに落つ。(新人第四卷第八號參照。)| 萌芽といふは實は基礎也、グラウンド也、游星の熱塊の中

に生命となり精神となる素を萌芽として含み居れりといふ、而も此素といふ萌芽といふものが大不思議物にはあらずや。其は唯だ後に生命となり精神となるものが巻き疊まれて潜在せるを意味するものにして、是れ實に熱塊以上の無限の實在と發展すべき一切物の究竟根據たる神其者にあらずや。熱塊其者が此大根據たる神の一小顯現なるのみ、熱塊の中に神あるにあらずして神の中に熱塊ある也。唯だオリヂンよりいへば熱塊といひ、原因よりいへば神と言はざる可らず、熱塊は神の發現の第一歩のみ。故に此第一歩たる熱塊の中に進化すべきもの、一切(神)を素として含めりといふは、言ひ換ふれば熱塊に即して神あり、又は神は熱塊に内在せりといふとに外ならず。——ブライデレル

ブライデレル
宗教哲學
二八〇頁よ
り二八四頁
迄参考

『宗教哲學』二五七頁参照。

○萌芽とか潛勢とかいふ説は假定に過ぎず、實は不可思議也。而も其は無にあらず、無より有は出てざれば也、如何なる形にかにて其處に生命といふ高活動の存せざる可らず、其物に即して存せざる可らず、其者を現勢たらしむるは神也。

○生命は物質を條件として、其れに連続して發現す、而も物質は唯だ原因的條件のみ、眞原因にあらず、眞因は神の目的的發展にあり。コーザル、メカニズムは、物の成る跡を見て、其を成らしむる窮極の原因を見ず、縁を見て因を見ず。

○ 福德調和及其を根據として神有を證する論については、ブライデレル一七六頁以下を見よ。

○ 神は正義の命令として蒞むのみならず、愛として吾人の心情を鼓吹す。ブライデレル『宗教哲學』二〇〇頁參照。

○ 過去に黄金時代を描きて人性の墮落を説く事については、ブライデレル二〇四頁以下を見よ。

○ 人祖の墮落即ち罪惡の起源也、以前には惡なしといふ教會説の批評は、全上二二〇、二二二頁を見よ。——Badの起源には(一)人祖墮落より説くもの、(二)インディフェレンチズムより説くもの(ブライデレル哲學二二五頁を見よ)、(三)自由意志より惡生ずと説くもの。

カントの
○ 人性惡の起原問題に關してはブライデレルの『宗教哲

“Radical
Badness”
theory 參照

學』二二七頁より二三一頁迄確論可讀。

○ イスラエルの宗教の發達特性等についてはブライデレル二四六頁以下を見よ。

○ 解脱問題 *salvation, redemption* 問題については全上二二六頁以下參照。

○ *Ein* 問題に關してはブライデレルの『宗教哲學』厭世觀、樂天觀の章を見よ。

○ 厭世觀の批評(シオペンハウエル等)については全上二二〇頁以下確評。

○ 萬物を本體に疊みたる方面より觀れば、一切個々物は生滅變化の相を超越して永恆常住の境にあるもの、この意味

絶對と差別
本體觀と差別
別界

に於いて我儕はこの身このまゝ常住なり、不滅也、不朽也、不死也、神也、涅槃也、本躰也、これ佛教及びスピノーザなどの喜んで稱へたる平等觀、本躰觀也。されど又萬物を差別に開きたる方面より觀れば、一切物に變化あり生滅あり發展あり進化あり。而して吾人はこの差別の方面を所謂無明の迷妄とすべき理由を見ず、此方面等しく吾人の疑ふべからざる莊嚴なる不可拒事實たる也。否此方面に重きを置かずんば人生畢竟無意義のみ、歴史も文明も一切の人生の内容は空ならむのみ。此の人生内容を排して無宇宙的消極抽象の涅槃觀に入るは、吾人の要求と合せず、唯だ存在(is)といふと *beingness* といふとのみの超絶觀は、スピノーザの本躰觀に於ける如く吾人が觀照の對境として一種の崇高

*スピノーザの生は此
佛の然の生は此
現一個の然の生は此
波を統一の進見
の統一の進見
戰の統一の進見
象の統一の進見
生觀の統一の進見
以終の統一の進見

寂靜を興ふれども、之れと共にむしろこれよりも一層如何にあるかといふ *beingness* の差別進化の方面が、即ち理想としての神が、吾人の關心の對境たる也。(アリストテレイスの超絶神を設けたる條参照。)

人格化

何物かつひに人格化觀を免るべき。ヘーゲル、ハルトマンの理といひ意といふも、人格的觀念を神に移したるもの、多くの物質論者、自然科学者等が宇宙人間の科學的説明なるものも、唯だ人的アナロジーを冷かに應用せるのみなるを見ると屢々なり。近くはヘッケル等が一元的エテルギの一一如性を以て萬物を説きたる如し、其エテルギに感情衝動ありといふ如き、如何に人的アナロジーを用ひたる

を見るべし。

平等と差別

スピノーザの神は内在的なるべし。其の神は、
神は個々物をインスパイアして活如たらしめ、其れに一貫の統一の意味を附せずして、
唯だ金魚が泡を吹く又入れるが如く之れを弄べる也。こ
ゝに回顧せらるゝは、アリストテレスの進化哲學也。
スピノーザの神は内在的なるべし。其の神は、
神は個々物をインスパイアして活如たらしめ、其れに一貫の統一の意味を附せずして、
唯だ金魚が泡を吹く又入れるが如く之れを弄べる也。こ
ゝに回顧せらるゝは、アリストテレスの進化哲學也。

スピノーザの神は、
神は個々物をインスパイアして活如たらしめ、其れに一貫の統一の意味を附せずして、
唯だ金魚が泡を吹く又入れるが如く之れを弄べる也。こ
ゝに回顧せらるゝは、アリストテレスの進化哲學也。

係活きざるが故に却つて超絶的となれり。内在して萬物の living unity となりてこそ神と差別との活關係はあれ、然らずして神の單なる一波一浪の出沒と見ては、内在は超在と撰ぶ所なき、抽象的、冷淡なるものと評すべし。——ストアと比較すべし、ストア亦一元的凡神論なれど、其の自然を見るや温潤也、自然には理性の一貫の意匠目的ありと説く也（西洋哲學史参照）。スピノーザにありては神と萬物との間は、近くして而も極めて遠し、これ神は力としても理としても道としても觀ぜられざるが故に、我儕の知了する能はざる實體なるが故に、其の顯現たる差別相も亦此等の力、理、道等の形容辭を附する能はざる唯一種必至的器械的事象とのみ見られたるならむ。（シチウイックの倫理史七八頁參

スピノザの脚註に於いての永恆の
實在として超在し、毫も時間上の差別界に發展する生因即ち力を有せざるもの也。彼れが本體と差別との關係は、力の關係、生起上の關係にあらずして唯だ必至の論理的關係のみ、差別は本體の內的必然の本性上 *esse* されたるのみ。三角形の本性が三角の和は二直角に等しといふ性質と論理の必至をもて關係せる如きのみ。ヘーゲルは之れを時間に展べたるのみ、而も其の力即ち生起的原因の彼れの理性哲學に無き也、ハルトマンが之れを補へる所以。——

照。スピノザの本體は論理上の關係に於いての永恆の實在として超在し、毫も時間上の差別界に發展する生因即ち力を有せざるもの也。彼れが本體と差別との關係は、力の關係、生起上の關係にあらずして唯だ必至の論理的關係のみ、差別は本體の內的必然の本性上 *esse* されたるのみ。三角形の本性が三角の和は二直角に等しといふ性質と論理の必至をもて關係せる如きのみ。ヘーゲルは之れを時間に展べたるのみ、而も其の力即ち生起的原因の彼れの理性哲學に無き也、ハルトマンが之れを補へる所以。——
スピノザの凡神説は一源ブルノより來たれどもブルノの神は自然界 *Natura naturata* の動因也、生命を□き込む力の源也、自然界に一元の生活の氣横溢すと説く。故に

スピノザの神は自然の論理因にして冷かなる數學的關係を有するのみ、意志生命として動くの面なき也、此點ヘーゲルと似たり。

スピノザのとは異なる、スピノザの神は自然の論理因にして冷かなる數學的關係を有するのみ、意志生命として動くの面なき也、此點ヘーゲルと似たり。

神論

吾人は圓滿完了の神を直覺すると共に、其が時間内に發展して差別の活動を取る神即ち *working force* として、生因としての神を欲す。生因としての神を説くは神の圓滿を傷つくるにあらず、むしろ神の圓滿に有限の一面を添へて一層之れを光彩あらしむるなり、デカルトの語の如く、*ホフエディング* 哲學史参照。スピノザは時間内にあらぬ *ground* としての、靜かに自ら論理的に擴がれる *substance* としての神を唯一の根據としながら、尙ほ時間内に萬物を生

論スピノーザ

ずる神を説きたるふしある、人心必然の要求なればなるべし。スピノーザは一方には“*Idea of God*”無限智等を以て直ちに神より來れる神の性の如く見たりしに拘らず、道德上の價値の差別、善惡の觀念等を一切差別の妄見とせるは、これ明かに其の知性を重んじて情意の方面を輕視せる弊か。スピノーザにありては實際觀と絶對の本體觀とを餘りに抽離し過ぎたり、權實の二つに分ち過ぎたり、是れ神の生因を説かず、時間上の發展を説かず、意匠目的を説かざる彼れが見の自然なるべし。彼れにありては神が差別界の根據たるには餘りにロジカル一偏也(スピノーザの倫理と維摩經一六六、七對照)。

平等と差別

スピノーザと佛教

平等と差別との關係は佛教にありても未だ十分なる解釋を得ざる也。これ畢竟佛教にては不生不滅の平等眞如の一躰を實相として差別象は其の實相上の戯れに過ぎずと觀ずれば也。謂はゞ差別の萬現象は、實相に取りては餘計のもの也、吾人の迷妄より造り加へたるもの也。勿論煩惱に即して菩提を觀じ、差別に即して平等を躰し得べし、されど煩惱といひ差別といふものゝ正當なる根據は不可解也、少なくとも其の根據は實相の上、平等界の上にはあらざる也、其はむしろ吾人の無明迷妄によりて生じたるものと説かる、本躰實相の界には之れを生ずべき原因あるなき也、佛教が差別の評價を根なし草の戯れと見る所以こゝにあり、其の差別を排せざるは唯だそれが平等觀に達する緣と

してのみ也、スピノーザの觀亦復これに同じ。要するに佛
 教もスピノーザも本躰實相を知的に靜觀して、其の意志衝
 動の方面即ち生因としての力としての方面を觀するが故
 に、差別を吾人の主觀の見様、妄見に歸する外無く、其の正當
 の根據は亡ぶる也。^{*} 随つて平等と差別との關係は正當に
 解せられざる也、少なくともこゝにはプラトーンなどが善
 惡差別の一切を攝して、其の統一者たり窮極の根據たる神
 を説かざる也。かゝる差別を統一する理想の神即ち差別
 神は彼等が所謂迷妄に過ぎず。——生因としての神即ち差
 別神は吾人の迷妄見に過ぎざるか、されどかゝる發展の神
 のみ吾人と交渉ある神也、同時に知識上の要求としては絶
 對者といふ無相の神の根據を要求す。この平等的根據と

^{*}ハルメニア
 一ス亦佛
 同見に落
 つ

神の觀念に於ける永劫の謎を解く
 不釋の神と進化的神との
 其の進化の全神と
 下の要求する神と
 の要する神と
 ハレソンの神と
 サリソンの神と
 の神と

差別的發展との關係は如何に説明すべきかは、永劫の疑問
 として残るべし、唯だ此かる二つの實在あるとは事實也、一
 を迷妄とするは吾人の取らざる所也。ハルトマンの如く
 知性と意志とを神の二本性と見、而して意志が理性に叛逆
 して差別界の生起を現すと説くも依然として説明は不盡、
 何故に絶對覺者なる意志が不平を起して、理性に反抗す
 るかと明らかならず。アリストテレスは超絶的神は圓
 満自存にして差別の原因ならず、差別こそ其の圓滿に向つ
 て進むと説いたれど、これはた二元の解釋也。要之、平等と
 差別との關係は眞に説き易からず、唯だ吾人は一を眞とし
 て他を妄とするの見を取らず、差別の根據の正當に、平等に
 あるとを信じて、其の價值別の迷妄を説かず、二者の間に深

アリストテ
レスを參
照

奥の關係ありと信ぜんと欲す、かくして始めて差別を輕視する佛教及びスピノーザの弊を免るべし。

○

我とは何ぞ
詩趣、趣味
なき宗教
(現代の宗
教を評す)
詩趣と宗教

『寸光錄』一
五三頁參照

「我」は第一、意識の統一作用としての我(カントのいふ如き)、第二、意識作用の對境に對する隠れたる主觀としての我、第三、意識作用に即して力又は意識の creative 能力として直覺さるゝ、我の三意義あり。第三の我即ち力の意識に於いて吾人の我の本性 innermost nature 實躰に觸るゝを覺ゆ(シオーペンハウエルを參照)、ルソーは感情によりて心作用と共に其の本躰我のあるとを直識すといへり。ルソーの見侮る可らず、カントの見淺し。

○

スピノーザ
論

論理の必至は唯だ思想上の則にして其が事實となるか否かは唯だ其れのみにては分明せず。萬物の事實上の存在は、スピノーザの如く單に思想の必然性よりのみ説くと能はず、其を事實とならしむるものはむしる意志也、力也、非理性的方面也。この點に於いては、ライブニッツの見一等を抜く。(西哲史ライブニッツ六四八頁參照。)

ライブニツ
ツと有神論
證

神論

實在論證をもぢりてアリストテレスの可能對現實の關係の上より神の存在を證せむとしたるライブニッツの見可一考。可能といふ中に神の實在は含まる。否完全なる實在者あればこそ、そが經驗上可能として現ざるなれとは言へまじきか。可能の根據は完全なる實在にあり、可能

を考ふると同時に、可能を成り立たしむる一切現實者を考へざる可らず(西哲史参照)。

○ このごろは菊に親しむ病かな

金屏の松は願はず冬ごもり

菊の香や病骨高く嵯峨として

神論

デカルトやロックの如く因果律を根據として神の存在を論證するを待たず、吾人は一實在物に即して直覺的に神の存在を認むる也、否、*non*する也。神の存在ほど直覺的に自明なる事はあらず、スピノーザの實躰亦實にかゝる自明的のものなりし也。されど神の存在の知識のみにては吾

人は満足し得ず、神と如何なる關係あるかを知るにあらずば吾人は安んぜざる也。要する所は神人の關係にあり、實在にあらず。

神論

○ ピーター・ブラウンは神は譬喩的形象を假らざれば寫しがたしといへり。單に譬喩的知識に過ぎざるが、吾人はシムボルを媒として直覺的に神の本眞の姿に分け入るを得るにあらざるか。

趣味と人格
人格の *sc-*
riens site
と *genial*
site

○ 主義が趣味に養はれたる、之れ人格也。——主義の渴愛に趣味は生ず、主義は根本也、趣味は結果也、光を取り巻く圓光の如し、巖をつゝむ花苔の如し、光は圓光を發射するに至ら

空氣を帯びて、
なるといつ
て、
感化する力
が、
す、
は、
多、
道、
多、
れ、
徳、
家、
無、
き、
也、

やうでなければ、主義はまだ人格とならない。宗教も然り、
他律的でなく神と相抱いて神がわが所有となつて其の大
光の中にいつも泳いでゐるやうでなければ、即ち神に對す
る愛が一種の趣味とまでならなければ宗教的人格は成ら
ない。約翰傳記者もロゴスが血肉となつて基督の人格は
出来たというてゐる、主義が趣味となつては人を束縛する
にあらずして人を自由にする。人格は自發的自由の也。

○

人格とは何ぞや。——人格の二要素——人格の廣狹二義
——moral principle. ある人を狹義の人格とす。——道德家宗
教家にも人格なき人あり。主義ありても趣味とならざる
人——廣狹二義の人格の共通點——他を感化する力ある

鍛冶家にも
人格あり

と——槌の一揮一下にも職業的良心を籠めたるものは人
を感化する道德的勢力を有す。——一切の事其の極致に至
りては皆モラル也、形以上の神行の一點に相會合する、妙
也、三昧也、精一也。藝術も道德も宗教もこゝに會す。

○

宗教とは何
ぞや

安心立命を宗教の心髓とするものあり。されど安心立
命は必しも宗教によらず、神によらずとも哲學によりても
其他の方法によりても得べし、宿命論にても唯物論にても
得らるべし、安心立命といひ融會無碍といひ潤達自在とい
ふ如きは宗教的信仰の結果のみ。或人は信仰を筌蹄とし
て方便として精神の無碍安立を目的極致とするものあり、
禪など之れに近きが如し。悟の方法は其の人々によりて

異なるを見ても知らるべし、無の一字を以てするもの、韓楹塊を追ふ的にするもの、煩惱を断ちく断ち□□るもの等……、されど宗教の眞諦は自己と自己以上の神との交通應化にあり、歸依にあり、敬虔にあり、依りすがるにあり、この一大要求を外にしては宗教の眞義はなし。結果は第二の事也、安心を得られやうが得られまいが、是れは第二義也、先づ純真無私の要求に迫られて神を拜するが第一也。宗教は功利にあらず、純乎たる人心の要求也、衝動也、功德、利益、福田はむしろこの要求の充たさるゝ結果として來たる、已むに已まれぬ要求是れ也、この要求以外に理由なし。

○ 嗚呼我れに誇るべき所一もあらず。我れは唯だ神より

得たる一個の自覺に立つて謙遜に世に叫ばむとするのみ。我れ病めりと雖も神は我れに一枝の筆を授けたまへり、神はよくこの弱き一枝の筆にも世界を征服する法力を□き込みたまふにあらずや。

○ 藝術家と宗教的自覺——ゲイテは吾人の best endeavour は無意識の瞬間に成功すといへり——。

明治四十二年九月十一日印刷
明治四十二年九月十四日發行

(度規
金壹圓貳拾錢)



編輯者兼
發行者

東京市牛込區大久保金丁町四十八番地
桐島政治

發行者

東京市京橋區中橋廣小路六番地
杉本要

印刷者

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
佐久間衡治

印刷所

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
秀英會

發兌元

東京市京橋區中橋廣小路
(電話本局五七七番)
大阪市東區北波邊町
(振替口座二八二三番)

杉本梁江堂
杉本梁江堂

杉本梁江堂
發兌圖書發賣元

東京市神田區表神保町 東京堂書店
 東京市神田區裏神保町 上田屋書店
 東京市日本橋區吳服町 北隆館書店
 東京市京橋區中橋廣小路 前川文榮閣
 東京市日本橋區本石町三丁目 至誠堂書店
 名古屋市 川瀬金華堂
 久留米市米屋町 菊竹金文堂

梁川寸光錄
遺稿

(內容) 寸光集。隨感錄自第一至第四。梁川
 (隨筆) 枕頭雜筆。病閒日記其一。同其二。
 (口給) 齊齋(著者)の書架。愛用の椅子。終焉
 (當時) ながらの書架。筆蹟(最後の日記)。
 (體裁) 書簡集同裝。內容各卷の表紙を寫眞
 版として挿入。紙數五百三十頁。
 (定價) 金壹圓貳拾錢。小包料内地金八錢。

本書に對する世評の一斑

●基督教世界 寸光錄は病閒錄回光錄の下圖也。下圖なるが故にシミにして鉛筆の跡縱横。從つて後者の如く文姿繚亂の趣饒ならずと雖も却つて故人の心境發展努力向上の消息が露はにさながらに讀まる。恰も八分通り出来上つた大理石像に名匠の鑿の韻を偲ぶが如し。……梁川氏は理智の人也、趣味の人也、信仰の人也。此の理智と趣味と信仰とが一意識一人格の内に融會し來つて光となり匂ひとなり能となつて同行の友さては後進の人々を滿了せずんば已まざらんとす。彼の文章は彼の人格なるが故に此の一種の魅力は全篇に横流し訶者をしておのづから難有い優しい温かい敬虔の情に涙ぐましむると共に一種犯し難き健實嚴肅なる威能は新らしき或る者を強く自覺せしむ。

●護教 若し夫れ著者の文章に至りては匂々詩趣を滿し章々韻味を帶ぶ。爰に金玉の聲を聞くべく爰に血涙の滴るを見るべし。余敢て喜んで此種の文字を世に紹介せざらんや。

●開拓者　もしれ散文と云はんよりも韻文的なる此の活ける文章は一種の神通力を以て全巻に播流し、其信樂の馥郁たる、悲哀の優柔なる、敬虔の深嚴なる、文章の美と相俟ちて吾人をして等しく其法悦の境に導き、恍として醉心地ならしめ、冥寂ならしめ、怡安せしめ、まがじみと譬しへもなき涙に潸然ならしむ。評者は病卧にありて一日此の書を手にし病苦を忘れて又巻を捲ふ能はず、一日ならずして之を通讀しぬ。眞に寸光録は故梁川氏の眞風光にして、信樂の書也、生命の書也、希望の書也、安慰の書也。評者は通讀の夜之を抱いて靜かに冥想し、安らかに眠りぬ。

●新公論　所謂寸光録の名に背かざる鋭い強い所感を以て満たさしめて居る……寒に句々々々みな是れ渾身の血を傾け盡した熱烈の文字である。

●警世新報　梁川氏は詩の門より入りて初利天に達したる等覺の菩薩で、大悟の奥籠より下れる地上の詩人である。然り梁川氏は詩人である。たま／＼山水花鳥を離れて天心より地軸にまで跳了し、參徹したる心靈の詩人である。されば梁川氏の遺著寸光録は斷片と雖も水のやうな詩光を放つ。末代稱に見るの大文章で且つ大詩傑である。

●近畿評論　要するに本書に表はれたる著者の宗教觀は、從來余が見たる近代の著書中にては、類稀れなる幽深博大、嶄新懇切のものにして、依つて以て心田に培ひしこと幾何なるかを知らず……讀者益々直ちに本書に就いて不涸の活泉を汲み、無盡の醍醐味に飽かざる。若し夫れ寸光録てふ題目に至ては、國者が著者の謙徳に果するあらんを恐れて特に然りしもの乎。嗚呼無邊の光明覺悟に寸尺

とのみいほむ。

●新小説　故人が筆の跡を辿れば通篇皆信仰と敬虔の聲ならぬはない、何れも權威あり深味ある文字ならぬけない。

●日本及日本人　其の一字一句にも尙ほ靈光的的確たるの認めらるゝありて、中には動かざる眞理の下に成れる一の教條として注目すべきさへあり。

●報知新聞　殊に先生が如何にして見神の境に到達せるかに就て研究せんとする者に取りては唯一の採なるのみならず修養に志ある人は必ず一讀の價値あり。

●國民新聞　氏の筆冊中最も主觀的に正直なる氏の當體を摸索し得べきものにして「一字一句猶ほ靈光の沛々たるものあり玲瓏の文字一語して直ちに人の肺腑を空靈とならしむ。

●中國民報　隨感錄を讀過して梁川隨筆に移れば、蒼鬱たる森林を出て、春の野邊を逍遙するの感あり。嚴肅なる理論少くして、或は落語觀を記し、或は自己の文章の未熟をかこち、或は讀書癖を語り、親鸞上人の『口傳鈔』をよみ、或は某氏に貰ひし水仙を喜び、或は南無阿彌陀佛なる名號の不可思議なる功德力を説き、或は詩的基督の研究を欲し、或は徳富蘆花氏と語りて蘆花氏は實に『詩魂と敬虔魂との炎のゆらめく美しい人』なりと評し、或は備中神の島への會遊を語り、讀む者恰も梁川氏と坐談するの思ひあり。

梁川 遺稿 病窓雜筆 附 道德的 理想論

本書は最も完成せる著者の遺品にして、其の二三の世に公けにせられたるものを除くの外は、皆是れ著者が永逝前數日、病苦の最難關中にもしたる血涙の文字也。附録『道德的理想論』の一篇は著者が最も夙くものしたる長論文にして、覇氣縱横、論を進めて危惧の念なく、筆をやりて些の凝滯なし。これ實に著者が宗教的生活に入る第一歩の足跡にして、一は著者が晩近の思想信仰を闡明し、一は『我觀錄』の猶ほ以前に遡りて其の思想の發途を極む。本書が、此の最初のものゝ最後のものとを收めたるもの亦所以なきにあらず。

梁川 遺稿 書簡集

上卷 下卷

(上卷 再版發行) 上卷口給。墓地及び筆蹟。下卷口給。墓地及び筆蹟。入各金壹圓十錢送料八錢。十月發行)

『書簡集上卷』に於ては著者は其の信仰の道程に於て親しく我等の同行者たり。共に悶え、共に惱み、而も温情熱涙、同行者と共に泣き、共に語り、其言ふ所切々として我等胸奥の琴絃に觸れずんば已まず、而も更に下卷に至りて其法悦信樂の一境に坐して醇々として神子の自覺を説き神の愛を語り如來の大悲を談ずるところ遂に我等の長兄たり先達たり師表たり又至仁の母たらずんばあらず。著者が病床六尺の一小天地は直ちに無邊の一大法座となりて未見未識の道友また親しく四方より來り會せり。世の惱める者よ、爾が胸中一塊の鬱結を碎盡せんと欲せば希くは來つて本書の著者に聽く所あれ。

回光錄

病間錄同裝箱入
著者肖像二葉挿入
定價金壹圓貳拾錢
小包料八錢

(第三版發行)

「病間錄」は著者が病床に於ける恒久にして熱烈なる煩悶史也自力奮闘向上精進の目くるめき足よるめく峻坂危磴を窮め盡して、正に彼の「見神の實驗」てふ光輝ある真理の第一峯は聳へ出てたり。而して此の赫耀たる眞理の第二峰上に立ちて悠々として靈界無邊の光景を眺めわたしたるもの即ち「回光錄」一篇の消息也、渴仰熱慕の境より讚美頌榮の境に達したる著者要求悲哀の域より歡喜信樂の域に進みたる著者自力健闘の生活より他力感恩の生活に移れる著者凡て收めて「回光錄」一卷の中に躍々たり法悦と健闘とを合せ得たる靜寧にして而も積極的なる著者の面目と其聖生活の消息を知らんと欲する者は希くは來つてこの一卷を繙讀せよ

病間錄

箱入上質刷新裝
定價金一圓廿錢
小包料金八錢

(改版八版)

本書は多年内録の病に臥したる著者内生活の實録也最も熱烈なる煩悶を経て最も光輝ある感應を得たる心靈の活史也時代の要求に觸れて時代を超越せる神祕久遠の海潮音を傳ふる一種の近代的默示録也此書一たび出でて我文壇思想界の波瀾高く揚り大方の批評集まりて危然一卷を成せり今や八版刻成る江湖の諸君幸ひに購買の榮を賜へよ

歐洲倫理思想史

梁川先生嘗て『西洋倫理學史』の著あり。後更に東西倫理思想史の大著を企圖して病聞つとめて筆を執らるゝと年あり、而も遂に東洋の部に至りて其全部講述の終らざる内に不幸にして逝られたり。本書は即ち其の西洋の部に屬するものなれども、先生が許多の倫理著書中にては最大にして最後のもの、該博の識、精透の見、傾けてこの中にあり。而して文章極めて平易明晰、初學者と雖もまた解するに難からず、希くは廣く本書の江湖に緝讀せられんとぞ。

碧瑠璃園著

齋藤松洲裝畫

吉田松陰

菊版美裝
全二冊寫眞
版ヨロタイ
ノ數葉
各冊金八拾錢
郵稅各八錢

大阪朝日新聞
連載好評

松陰先生は、明治維新の下手人なり、時代思潮の原動力者なり、先生の短命なる生涯は、多
涙多艱、時勢に容れられず、しかも、遂に過激の罪に問はれて、江戸千住に梟せられたる
事情に至りては、血爲めに湧き、骨爲めに鳴り、懦夫も又起つと思ひあり。
此編傳奇小説家として當代第一の稱ある碧瑠璃園が心血を注げるの作にして、一たび大阪
朝日に掲げらるゝや、二十萬の讀者愛誦盛かず、或る時は慷慨の涙、或る時は悲痛の情、
凝て同情となり喝采となる、弊堂近く一本として發賣せんとす、一面に於て家庭の好讀物
たるべく、一面に於ては青年の立志談として推薦を懼す幸に愛讀を給へ。

天囚西村時彦著

日本宋學史

菊版總クローリス綴
コロタイプ版十八葉
箱入四百五十餘頁
定價金貳圓
小包料金拾貳錢

我が國民道德の基礎を尋ねて、儒教の明致を論じ、宋學の神髓たる學庸論孟の四書が、士道教育の普通讀本たりし淵源に遡りて、鎌倉室町二期に於ける傳來流布の事蹟を考究し、儒と禪と武士道との關係より、徳川時代に於ける學說勃興宋學一統の狀態に叙し到り、維新の鴻業、明治の文化、並に此に根柢するを説きて、以て將來の徳育研究に資する所あらんとするは蓋し本

書の目的なり、成齋重野博士之を稱して

考証的確 文辭精美 天下有益之著

と云はれしに徴して其の内容を知るべし。曩に『宋學の首倡』と題して「大阪朝日」紙上に連載されしが、今や著者に請ふて増補訂正を加へ、關係文書を附載して四百頁餘の大冊となし、且つ今の名に改めて以て有心者の前に提供す。挿む所の木像畫像及び古書畫數十種は皆名山の秘、舊家の藏、天下希有の物たるを以て特に精巧なるコロタイプ版となし、以て闡幽顯微の意を致せり。請ふ、風教維持に心ある諸君子、一本を備へて以て研究資料に供せられんとを。

IF5627

柳川春葉 佐藤紅緑共譯 齋藤松洲裝訂

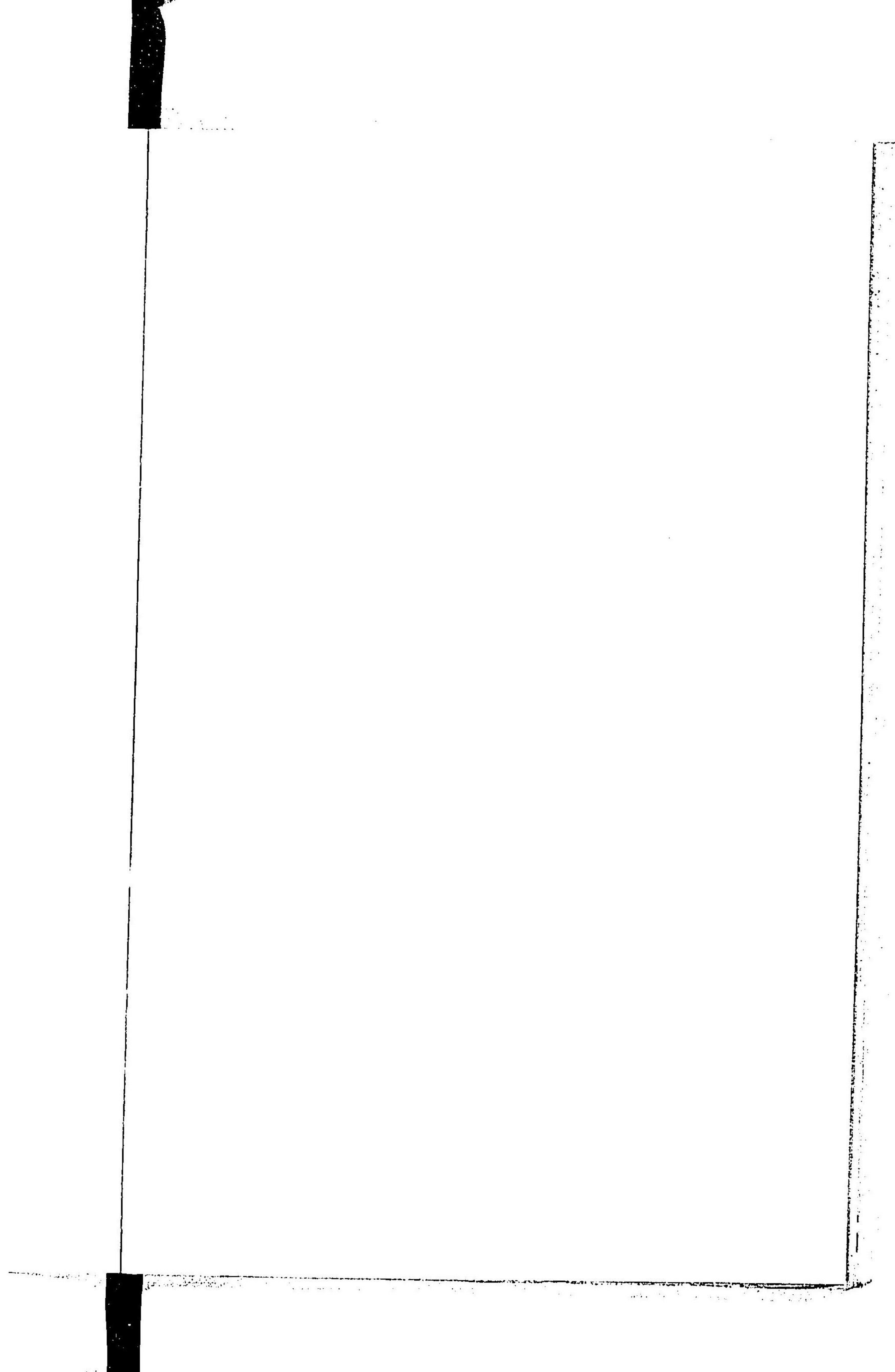
イブセン全集

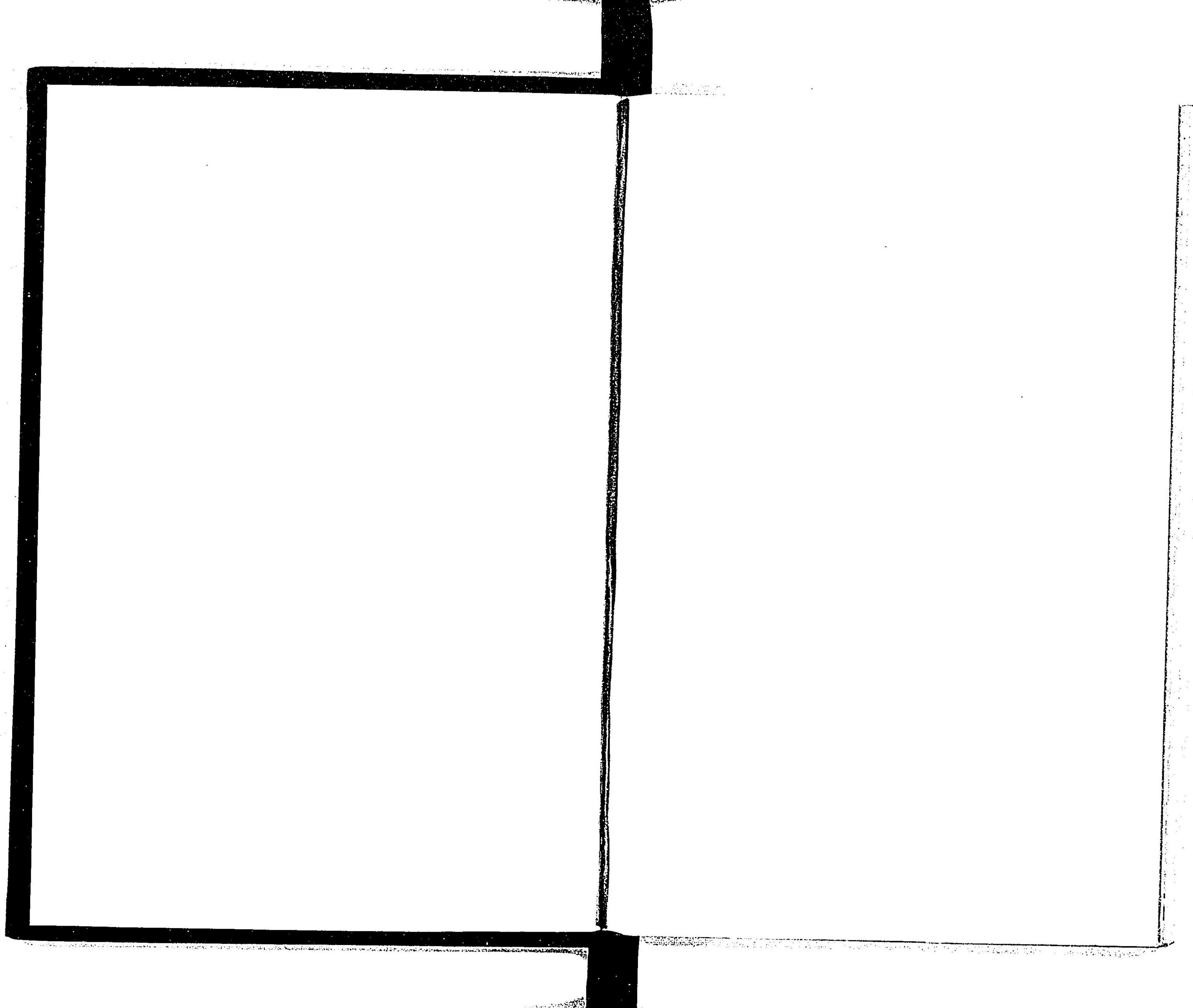
驚嘆すべき出版

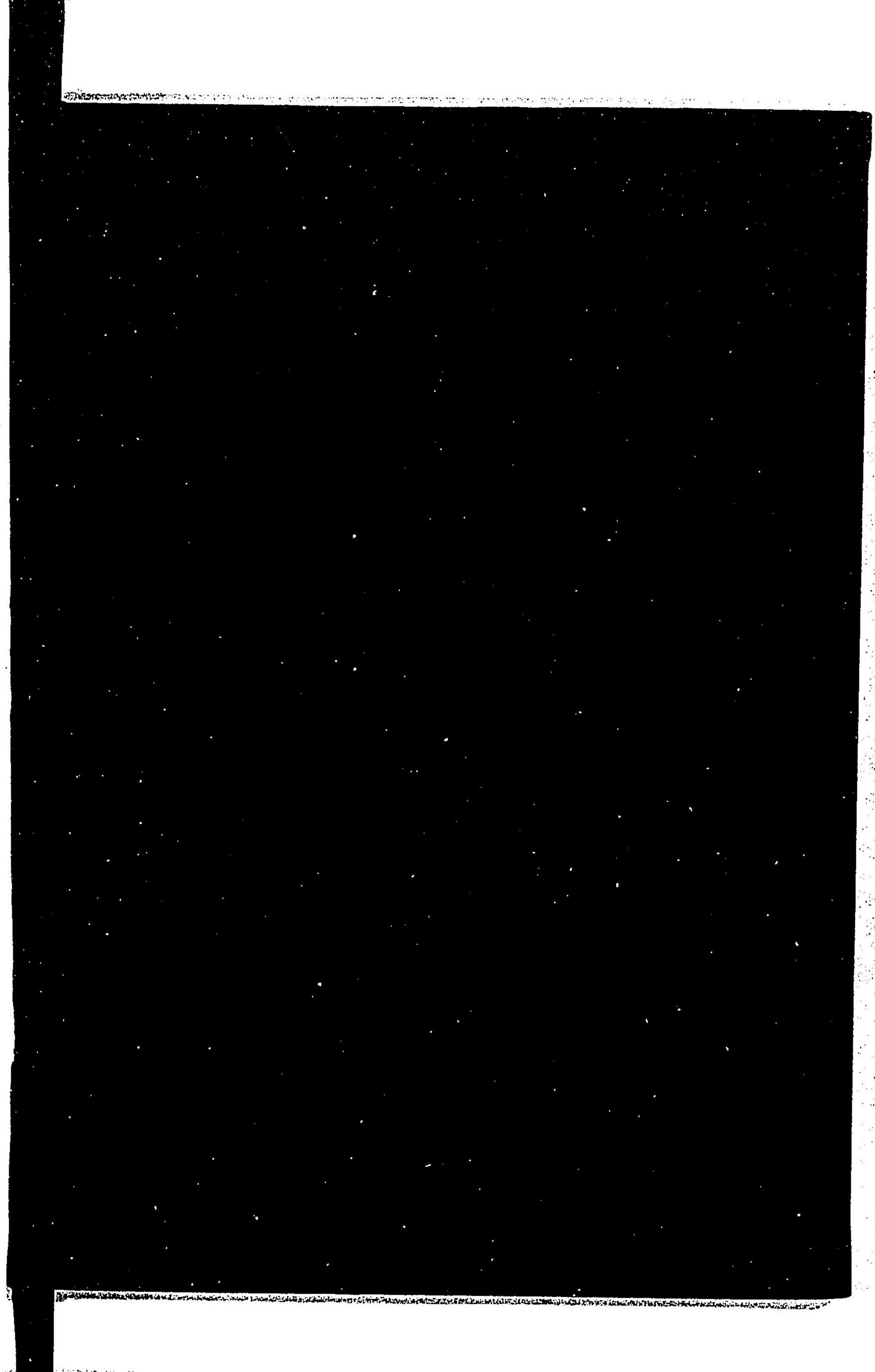
全部十二卷 (每巻二圓三十錢) 總クローズ綴箱入頗美裝

十九世紀文學の初頭に立ち、藝術の新天地に曉鐘を撞いて、世界の果ての果てまでを覺醒したるイブセンの全集翻譯を出版して、我が文界思想界の覺醒に資せんとす。イブセンに註釋を試みんば蛇足、唯だ此全集が譯家兩先生の慘愴たる苦心に成りしことを廣く告げて、敢て江湖に問はんのみ。激烈震駭すべき近代思想を味はんと欲する者は須らく本書を繙かるべし

第一卷 蘇生の日 (四十二年) 第二卷 (四十二年) 第三卷 以下續刊







88
325

201745-000-4

88-325

我觀錄

網島 梁川/著

M42.9

EDA-0041



